法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

法政と社会運動家

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
65
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
2019-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021819

法政と社会運動家

宮永　孝

はじめに
一　ロシア革命　日本を震撼
一　法政の学生および教員による社会主義運動
一　法政を追われた教師たち
一　三木　清はなぜ法政にきたのか
一　法政における三木　清
一　ふたたび獄中へ
一　三木の哲学修業と遺訓
一　戸坂　潤のさいご
あとがき

はじめに

社会とはなにか。その定義は、ひとによって大いに異なるが、つぎのように平易に説明できよう。

一　共同生活をしているひとの集団。［近思録・治法］

二　人びとが生活しているこの世。人間の共同生活体。

三　ある共通の利害または目的のもとに、大多数が生活するために作りあげた永続的結合。［『特高警察読本』］

四　社会とは人間の共同態（きょうどうたい）である。生活、利害の共同態である。［和辻草稿「国民道徳論」］

注・態は物のかたち、すがたの意。

われわれが住むこの日本社会だけが特別なものではない。社会そのものの性格は、いずこの国においてもおなじである。社会の主なる構成員はひとである。社会を分解するとどのようになろうか。

社会は、ひとつの共同生活体であると同時に、綜合的なひとの一大集団でもある。社会は、共同社会と団体（ひとの集団、部分社会）から構成されている。

共同社会
- 家庭――おなじ家に住む血縁者。親子・夫婦・兄弟などを基礎とし、生活をともにする集まり。
- 村落（むら）――都市に対する農村・漁村などをいい、ひとがあつまって生活している所。
- 町――人が多くあつまり、家屋が立ちならんでいる所。商店のあつまった地域。
- 都市――大きな町。政治・経済・文化の中心地。

団体とは、多くの人があつまって組をなすもの。大勢のひとが共通の目的であつまって作る集団の意である。が、つぎのようにわけることができる。

団体
- 会社――営利事業を目的とする社団法人。
- 役所――役人が公務をあつかうところ。国家の事務を取りあつかうところ。
- 商店――商品を売る店。売買を通じての業者と顧客との社会関係がある。
- 学校――教師が生徒、学生を教育するところ。
- 宗教団体――神社・寺院・教会などの集団。
- 労働組合（協同組合、共済組合）――労働者が労働条件の維持や改善、労賃（労働にたいする報酬）や社会的地位の向上をはかるためにつくる集団。

これらの団体は、それぞれ特定の目的を遂行するためにつくられた部分社会である。

国家とは一定の国土にすむ人民を支配、統治する団体もしくは機関の意であるが、全体社会そのものでなく、部分社会にすぎないのである。

日本の古代社会は、ひとが生れつきもっている能力や性質を発揮し、外界の変化に順応してくらした世界であった。が、長いときをへて、組織化された社会――日本という国家が形成された。社会生活上の規則となるものは〝法〟であり、われわれはそのおきてにかなうように日々生活を営んでいる。

社会問題に関する組織活動――生産と分配は共有するものとし、貧富の差をなくし、自由平等の世のなかをつくろうとする運動を――そうじて〝社会運動〟という。が、そのような新興思想（社会主義思想）がわが国に入ってきたのは、第一次世界大戦後のことであった。

国家のように社会的規模が大きくなると、制度と組織において、不平等・矛盾・不平不満などが生じ、やがて体制への反対者は、お互いつよく結びついて結社（団体）をつくるようになる。かれらはさらに同志をつのり、運動を展開するために策をたて、いろいろ行動をおこすのであるが、それは社会秩序を守る側の権力と衝突し、禁圧される。

社会運動が発生する条件とかたち。

社会運動は、社会問題に関する運動である。それは経済や社会や法律などの組織やしくみ、きまりなどがもつ欠点を改めようとしたり、それに抵抗する運動である。が、それにはどんなものがあるのか。

テロリズム――暴力や恐怖手段によって、政治的、思想的の対立者を打倒しようとする態度。

農民運動――農業に従事する百姓らが団結して、地主や当局にたいして起こす要求や反対運動。

労働運動（争議）――労働者がじぶんたちの利益をまもるために、雇用者にたいして団結しておこなう運動。示威（じい）運動（デモ）、すわり込み、強訴（ごうそ）、ストライキ、怠業（サボタージュ）など。

反戦運動――戦争に反対する運動。ビラなどをつくり、ばらまく。

演説、講演――聴衆にじぶんの意見や主張をのべ、行動をうながす。

びら張り、びらまき――宣伝のために、ちらしを人目につく所に張ったり、ばらまいたりする行為。

おしかけ――招かれないのに相手のもとに出かけ、主張をのべたてたり、要求する行為。

このような急進分子の行動をつきうごかしているものは、多くのばあい欧米から入ってきた外来思想であった。とくに本稿の主要テーマである、教師や学生らの戦前における社会主義運動の動機となったものは、

マルクス主義（唯物史観――歴史が発展する根本の力は、物質的、経済的生産力にあるという考え――にもとずき、無階級社会の実現を目的とする。階級や搾取のない平等世界をめざす考え方）

であった。

マルクス（一八一八～八三、ドイツの経済学者・哲学者・社会主義者）やエンゲルス（一九二〇～九五、ドイツの社会主義者）が唱えた科学的社会主義を一名〝マルクス主義〟ともいうが、この新渡の思想にくわえて民本主義（民主主義（デモクラシー）の古い訳語）が盛んになったのは、大正七、八年（一九一八、一九一九）ごろのことらしい。

一　ロシア革命　日本を震撼

ことに日本国内に、

ロシア革命（ルスカヤレボリエンシヤ）――一九一七年（大正6）三月（ロシア暦二月）、ロマノフ家をたおし、ソビエト政権を樹立した世界初の社会主義革命。

ドイツ革命（ドイチェレヴォルツィオーン）――ドイツ帝国から、ヴァイマル共和国への移行をもたらした民主主義革命（一九一八［大正7］～一九年［大正8］）。キール軍港で海軍の反乱、ゼネスト、デモなどが起り、皇帝や諸王侯が追われた。

などの異常な事態が伝わるや、一部の労働者や知識人――社会主義者、共産主義者、無政府主義者らは、大きな衝撃をうけ、こおどりして喜んだはずである。が、日本政府をはじめ、一般大衆はその性格がよくわからなかった。(1)

当時ロシアは、国土が七千万平方マイル、人口は一億八千万人、世界最大の国家であった。十七世紀以降、ロマノフ家が支配し、絶対主義体制をとっていた。ロシアはヨーロッパの超大国ではあったが、国民の生活程度はひくく、大多数は無知文盲であったから、威圧にたいして服従することを知っていても、物事の道理や理屈がわからなかった。考えが古く、新しいものを受け入れることのできぬ官僚が、政権をひとりじめにし、人民を強圧し[2]ていた。

ロシアの革命は、時代のうごきや流れにそむいた専制政体が招いた当然の結果であった。

ロシア革命の発端は、帝政ロシアの首都ペテログラード（一九一四年にサンクト＝ペテルブルクからこの名称になった）やモスクワで勃発した食糧の欠乏に起因し、食糧配布の不平均から労働者が暴動をおこし、ついに革命に変じたものである。

ロシア革命が勃発したことを、わが国の邦字新聞（『東京朝日新聞』『読売新聞』『東京日々新聞』『都新聞』『万朝報』）などが、外電としてはじめて報じたのは、大正六年（一九一七）三月中旬のことである。『東京朝日新聞』は、三月十六日につぎのような「号外」をまず出し、ついで翌十七日から詳報をのせた。

THE ROMANOFF DYNASTY ENDED IN RUSSIA; CZAR'S ABDICATION FOLLOWED BY MICHAEL'S; CONSTITUTIONAL ASSEMBLY TO BE CONVOKED

WILSON APPEALS TO PATRIOTISM TO AVERT STRIKE

STRIKE EMBARGOES GROW TIGHTER

SINISTER HAND SEEN IN STRIKE

PLEDGE OF REFORM RUNGS IN GERMANY; JUNKERS ASSAILED

Universal Suffrage and Full Political Amnesty Are the Bases.

DUKE NICHOLAS AGAIN HEADS ARMY

RUSSIANS HERE AID NEW CAUSE

『ニューヨーク・タイムズ』紙が報じる“ロマノフ王朝終えん”の記事（1917・3・17付）。

東京朝日新聞号外

大正六年三月十六日発行

●露国大革命

十五日合同通信社桑港発

倫敦来電――露国大革命勃発し　現皇帝多分退位し　皇太子即位すべく　議会及陸軍部　各要部　悉く顚覆せられ　政府は親独派の官吏を悉く　駆逐せんとするものなり

而して（しかも）最近三日に亙り　モスコー及ペトログラードを主とし　間断なき（たえまなく）革命戦争演ぜられ　為めに多数の家屋政府建築物兵火に焼かれたり　一方ペトログラードより倫敦に達せる電報に拠れは　多数の閣員監禁せられ　其の内首相スツルマ及プロトポポフ両氏は　後解放せられたりと

更に後報（後信）に拠れは　其後ペトログラード及モスコーに於ける政府委員に依り　仮政府組織せられたりと伝へられ　又ペトログラードに於ける三万の軍隊は　革命軍に援助を与へたりと伝へらる　更に伯林官設新聞局の公表する所に拠れば　露国の革命は　三月十一日を以て勃発し　議員エンゼルハード氏は　ペトログラードに於ける司令官に任命せられたりと

注・ルビおよび注は、引用者による。

三月八日、九日……ペテログラードの工場労働者らは、ストライキをおこし、「パンをよこせ」と叫びながら市内をうろうろと歩きまわり、パン屋を襲ったりした。首相は陸海軍、農務、交通、商工の各大臣、市長らを招集し、糧食補給問題について協議し、この問題を市参事会に一任した。が、ストライキがおさまるきざしはなかった。

三月十日ごろ……軍隊および憲兵が出動し、デモ隊と衝突し、各所で死傷者をだした。

三月十一日（日）……国際ロイター電が伝える記事〝ペトログラードのパン屋襲撃〟によると、――大雪のために食糧の到着がおくれ、市民の中にパニックに陥る者が生じ、パン屋をおそった（*The Japan Weekly Mail*, 一九一七・三・一七付）。

フランスの絵入り紙『イリュストラスィヨン』の特派員によると、ソリと市街電車もゼネストに参加し、うごかなかったという。新聞は発行されず、電話は不通。街はわりと平穏であったが、殺し合いがおこなわれている所もあった。軍隊から離脱する兵もいた。特派員が目撃者から聞いた話だと、こんな事件があった。

ニコラス駅で、あつまって来た群衆にたいして、警察署長がサーベルを使ってけ散らすよう命じたとき、コサック兵の中隊を指揮していた大佐が、この命令を撤回するよう叫んだ。激怒した署長は、大佐にピストルをむけ撃とうとする寸前、一人のコサック兵は、その署長の頭をたたき割ってしまった。警官らはそれをみて四散した。群衆はコサック兵たちにかっさいを浴びせた（「三月十一日、十二日の街の光景」『L'Illustration』紙所収、一九一七・四・二一付）。

三月十二日……軍隊の一部はストライキに加担し、各所において警官隊に発砲した。デモは暴動の様相を呈し、〝赤旗〟を押したてて市中をねりあるき、砲兵工廠や裁判所、監獄などを襲った。囚人は解放された。事態は収拾がつかなくなっていた。

三月十三日……正規軍の三連隊と近衛兵の大部分が暴動にくわわり、「冬宮」の対岸にある旧砲台を占領した。全市は無警察状態であり、暴徒は「政府をたおせ！」とさけんでいた（*The Japan Weekly Mail*, 一九一七・三・二四付）。

三月十六日……ロシア皇帝は退位し、摂政が任命された（ロンドン特派員発――『東京朝日新聞』大正6・3・17付）。

三月十七日（土）……『The New York Times』紙（一九一七・三・一七付）は、外電として、つぎのような内容の記事を掲載した。すべての政府の

建物には、〝赤旗〟がかかげられていること。パンがふたたび手に入るようになったこと。ソリにのせた多量の小麦粉が、群集のかっさいを受けながら、通りを行ったこと。

また革命党員によって、ロシアの秘密警察の文書館が襲われたこと。事務所や金庫があらされ、大量の書類が火炎の中に投げ込まれたが、すべてではない。新政府はスパイや情報屋のリストを入手しており、かれらは早急に調べられること。

旧官僚は全員監禁され、新内閣の政綱（政治上の重要方針）が発表になった。

一　政治および宗教上の罪人は、すべて直ちに大赦をおこなう。
一　言論集会の自由、労働団体を組織する自由、ストライキの自由をみとめる。
一　憲法を制定するための議会を召集する。
一　社会上、宗教上における国民的制限を撤廃する。
一　普通選挙権にもとずく、全住民が参加する選挙をおこなう（The New York Times, 一九一七・三・一七付）。

注・『東京朝日新聞』大正6・3・19付を参照。

ロシア革命の経過については、『東京朝日新聞』以外にも、各紙（『都新聞』、夕刊『万朝報』その他）もかなりくわしく報じた。が、見出しの中には、読者の目をひくような鳴りもの的なものもあった。

▲露国皇帝退位
　露都来電――露国広報に曰（いわ）く　露国皇帝は退位せり（3・17付）

●露国維新の成功
　▽大公摂政辞退と其（その）選挙

▽立憲的自由平等の政綱（3・18付）

●形勢急転直下

▽問題急転して国体変更に及ぶ

△結局共和政体か（3・19付）

●国露着々（ちゃくちゃく）民本主義

▽専制政治廃止の決議

▽各地方新政を執行（3・23付）

▲専制廃止決議（3・18付）

ペトログラードのネフスキー街で，窓からの銃声におどろく群集。
『イリュストラスィヨン』紙（1917・4・14付）

ペトログラードの本通りのバリケード。
『さし絵入りロンドン　ニュース』紙（1917・4・21付）

注・『東京朝日新聞』大正6・3・17～22より。

『読売新聞』（大正6・3・17付）は、中段あたりに

● 露都の大動乱
▽軍隊冬宮を占領し
▽全市無秩序に陥る

といった見出しのもとに、詳報をのせている。

その内容を一部意訳すると、つぎのようになる。

――九日以来、露都のペトログラードに動乱がおこり、同市の軍隊の一部はこれに参加し、官庁その他にたいしてしきりに発砲した。ロシア皇帝の離宮である冬宮は、ついに軍隊によって占領せられ、多数の政府や民間の建造物は兵火に焼かれ、同地裁判所は目下焼けつつあって、同市は無政府の状態にある。

『東京日日新聞』（大正6・3・17付）は、最上段に二段にわたって外電（ニューヨーク特電、サンフランシスコ電報、ペトログラード特電）をのせている。

● 露国に革命乱勃発す
親独派の官吏ことごとく駆逐せられ現皇帝退位せん
［ニューヨーク特電］（十五日特派員発）

ベルリンからの来信およびペトログラードのその筋からの報道によると、ロシアに革命が勃発した。ロシアの下院は、政権を掌握し、官僚全員を投獄し、宣言書を発した。もはや内閣は存在しないという。陸軍は革命党にくみし、ペトログラード市民は、食糧品供給の失敗、輸送機関の停止を政府の責任とし、激こうした。

『都新聞』（大正6・3・17付）は、

露国に大革命起る

△皇帝退位　△革命政府組織

といった見出しをかゝげたあと、ロシアに大革命が勃発し、皇太子を即位させようとしたが失敗したと報じている。

革命の主旨は、政府の親独派の官吏をみな追い出すことであった。ここ数日にわたり、モスクワやペトログラードにおいて、革命戦争がおこり、多くの家屋や政府の建物が兵火によって焼かれた。

『万朝報』（大正6・3・17付）は、上段に二段ほど、ロンドンからの外電として、ロシア革命について報じている。

露国の大革命

――皇帝退位せんとす

ロシアに大革命が突然おこり、現皇帝が退位し、皇太子を即位させようとしたが不首尾におわった。政府は親独派の官吏ことごとく駆逐しようとした。

わが国の一般の労働者や主義者は、「号外」や新聞報道などによって、ロシア革命に共感し、同情的であったと思われる。かれらは、この未ぞうの変革についてどのような〝感想〟をもったのか、つぎにその摘録をかかげてみよう。

生きる光明を与へたり　仙台　原田忠一

貧しく無学のわたしは、いつも口ぐせのように子供たちにいってきかせていた。おれのような貧乏職工の家に生まれたことを身の不運だとあきらめて

くれ。お前たちは一生喰いぱぐれがないように、技倆をみがき、職工としてくらしてゆけ。ゆめゆめ大望を起こすな。

ところが思いがけず、ロシアで大革命がおこり、またたく間に天下は労働者の手に帰した。無想だにしなかったことだから、いっとき面くらってしまった。わたしはおどり上り、家に駆けこむと、子供たちを抱きしめ、こう叫んだ。「おーい子僧ども、心配するな、お前たちだって天下は取れるのだ！総理大臣にもなれるのだ！」。ロシアの革命は、われわれに生きる希望をあたへてくれた。

民衆の威力　　楠　政市

極端な専制政治をやって、恨みのタネをまけば、どうせ倒されるのは当然である。が、まさか国運を賭しての戦争中にあんな大騒動がもちあがろうとは意外であった。ぼくは号外を手にして、思わず快哉をさけび、血をわかせた一人であった。

みかけは強くても案外よわいのは専制の力である。いちど民衆の奮起にあえば、朽木（くさった木）よりもろかった。真の自覚なき、烏合の勢は、ついに何ごとをも成就するものでなく、かえって個々の身を危くするものであることをまざまざと教えられた。

大きな同盟罷工　　神戸　立花秋太郎

ロシア革命勃発の号外を手にした当時、じつにおどろいた。革命は何のためぞ。この革命たるや、じつにわれわれ労働者、資本主は後学のため学ぶべきなりとおもう。

他山の石もて磨けど　　八幡支部　柴田日東

わが日本帝国は、文明国だ一等国だなんてさわいでいるが、そのじつわれわれの処置にはいっこう無頓着（まったく気にかけない）らしい。われわれは第四階級にある平民だ。むろん平民でたくさんだが、われわれも文明国の労働者となりたいものだからね。

先づ目を覚せよ　　南千住支部　松村信一

労働者が資産家にたいする不平不満、また生活上の不安心は昔日より、つもりつもりて一機会あれば必ず破裂するだけに膨張せり。ロシア革命は、資産家対労働者の競争なり。労働者は個人としては、はなはだ弱者なり。ゆえに一致団結して、その衛（まもり）にあたれば、その力よろしく資産家にたいするを得べく……

正に危機は近づく　大島町　深川中嶺

社会主義なんて、いまがいままで学者の空想とばかり思っておった――が、しかし、生産機関の共有も土地の分配も、荒けずりながら出来あがったからおもしろい。

吾等の得たる教訓　大阪第一　安本　仁

ロシアの革命によって、われらに与へられた第一の印象は、団結の力の偉大なることであった。

多年きょくたんに自由を束縛されて、悲惨なる境遇にあった露国の労働階級が、意外にも自己の手に一躍して（にわかに）、自由の天地を創造しえたのは、じつにこの偉大なる団結の力と不断の努力のたまものであったと、われらは信ずる。

注・『労働及産業』第7巻第10～11号所収、大正7・10～11。今井清一編、解説『大正思想史　1』筑摩書房、昭和53・2。

一九一七年（大正六）三月（ロシア暦二月）――労働者のストライキと食糧（〝パンよこせ〟）デモに軍隊が合流し、二月革命がおこり、ニコライ二世は帝位を弟にゆずったが、同人はそれを辞退したので、さしも三百年以上も繁栄を謳歌したロマノフ王朝のツァー体制はここに倒れた。首都に労働者・兵士の代表からなる〝ソヴェト〟（会議の意）が生まれ、軍事力をにぎり、一方自由主義派国会議員よりなる臨時政府が樹立し二重権力体制が現出した。この仮政府は戦争続行をきめたために、国内情勢は昏迷し、うちわもめをやった。十一月（ロシア暦十月）、ボルシェビキ（多数党の意）が武装峰起し、政権をにぎり、レーニンを首班とする世界初の労農政府が誕生した。

ロシアさいごの皇帝ニコライ二世（一八九七～一九一七）は、二月革命で退位後、家族とともにトボルスク（ロシア中部）のかたいなかに幽閉されていたが、十月革命後、銃殺された。

かれは先帝以来の虐政により、人民の不満や怨恨のすべてを背負って逝かねばならなかった専制政治のあわれむべき犠牲者でもあった。

このロシア革命の影響は、わが国にじわじわと現われた。大正七年（一九一八）――富山県中新川郡西水橋町で起った米騒動は、たちまち全国に波及したし、世界の大勢に逆行する頑迷ころうな思想を撲滅しようと、学生運動も胎動しだした。

ロシアにおいて労働者階級によって〝社会主義革命〟が成功したというニュースは、わが国の前衛的な学生を刺激し、それに呼応するかのよう

に、社会改革実現のために行動をおこした。

一　吾徒ハ　世界ノ文化的大勢（いきおい）タル　人類解放ノ新気運ニ協調シ（ときの新しいめぐりあわせに心をあわせる）　之カ促進ニ努ム

一　吾徒ハ　現代日本ノ正当ナル（道理にかなった）改造運動ニ従フ

注・『LA PIONIRO 先駆』創刊号（大正9・2・1）より。

を綱領（基本方針）とする「新人会」が、大正七年（一九一八）十一月東京帝大に生まれた。

これは吉野作造（一八七八～一九三三、明治から昭和期にかけての政治学者）らの指導をもとに、学生を中心とした社会主義思想の運動団体であった。特高が秘かに調べたところでは、つぎのように報告されている。「新人会」は、会員数三十七名。機関誌『同胞』（毎月一回、二〇〇〇部）を発行し、主幹者（中心的人物）は、赤松克麿（明治27年生まれ、府下日暮里町谷中本町二番地斎藤方）である。ほかに「新人会」の中心人物としては、

顧問

吉野作造

森戸辰夫

会員

佐野学　棚橋小虎

岡上守道　新明正道

新居　格　辻崎一雄

嘉治隆一　早坂二郎

麻生　□

などがいる。

「暁民会」は、大正八年（一九一九）二月に、早稲田大学において創設された運動団体である。会員は六十名。主幹者は、高津正道（明治36生まれ、府下戸塚町大学源兵衛二三一）である。

会員としては、

高津正道　八幡兼松
高瀬　清　山上正義
三田村四郎　池上武士
原沢武之助　露人
本多秀麿　エロシエンコ
中名生幸力　鮮人
浦田武雄　元鐘麟
林（？）忠義　韓硯相

などが名をつらねている。

脈絡（つながり）としては、

建設者同盟　新人会　東京北郊自主会
オーロラ協会　東京労働運動同盟会等

注・大正十年四月十五日調　思想団体表　内務省警保局より。

「暁民会」は、「いっさいの旧勢力を排して、新秩序の創造を期」したもので、おなじく早大の「建設者同盟」（大正8・10成立）は、「もっと合

理的なる新社会の建設」を綱領としていた。また法政大学には、当時勃興したる自由主義の波にのった「扶信会（ふしんかい）」という思想研究団体があった（図書怠人「大正十年度」『法政大学報』第十三巻・第二、三号所収、昭和10・3）。

ついで全国の大学・高等学校・専門学校などに、〝社会思想研究団体〟が、つぎつぎとつくられていった。そういった研究団体ちゅう――一高、三高、五高、七高、佐賀、浦和、新潟の七高等学校の「社会科学研究会」は、大正十一年［一九二二］九月に連合し、「高等学校連盟」（いわゆるH・S・L）を組織し、同年十一月、「新人会」（東大）「建設者同盟」（早大）などが中心になって「学生連合会」（全国の大学、高校、専門学校計二十六校）を結成した。この団体は、社会科学の研究と普及を目的とするものであった。(3)

大正十二年（一九二三）の後半より、翌十三年（一九二四）前半にかけて、一般の社会主義運動はいっとき沈滞状態となり、学生の思想運動も潜伏の状態にあった。が、大正十三年の後半から双方しだいに活動をはじめ、「学生連合会」（学連）は、東大において全国大会を開催し、名称を「社会科学連合会」とあらためた。その下に関東、関西、東北の三地方連合会をもうけ、研究、普及、宣伝を新方針とした。(4)

学生の社会運動

これは、大正七年（一九一八）ごろにはじまり、昭和七年（一九三二）にいたって禁圧（権力によって圧迫し、禁止する）されるまで、前後十数年にわたる特異な社会運動という。学生は近代資本主義社会において、まとまった資産をもたぬ無産階級の構成員であり、その社会的地位の向上と解放のために、団体運動を組織し、活動した点にその特徴があった。かれらは資本主義社会の矛盾に直面し、その解決のために社会運動に身を投じた（菊川忠雄『学生社会運動史』海口書店、昭和22・6、二～三頁）。

学生による社会運動は、けっして大衆的組織とはならなかった。しかし、治安を維持するのをしごととする当局からみれば、それは共産主義運動の一端であり、マルクス主義、レーニン主義の理論と実践を目標とするものであった。(5)

社会運動のすべては非合法の行為であり、その時代の社会規範（法律）を無視する者は、当然処罰された。

学生の社会運動など、労働者からみれば、じつに青くさいものであり、高等遊民のおあそびと考えられていたかも知れない。

社会運動の宣伝・教化の形態（かたち）は、どのようなものであったのか。

民衆の感情にうったえることを手段とするもの……演説　座談会　歌　演劇（芸）　活動写真（映画）
出版物、広告、看板などを手段とするもの……書物　新聞　雑誌　ポスター　ビラ
学習と啓蒙活動を手段とするもの……研究会　講習会　読書会　座談会

一　法政の学生および教員による社会主義運動

大正十二年（一九二三）――弁論部の学生約三十名を中心に、「法政大学社会問題研究会」が発足した。それを指導したのは、

北沢新次郎（一八八七～?、早大卒。早大教授、学士院会員）……大正初期、東大の「新人会」に対抗して、浅沼稲次郎らと「建設者同盟」（早大学生運動の草分け）を創立し、学生らの指導にあたった。のち東京経済大学学長。

平貞蔵（一八九四～?、法大教授）……東京帝大政治学科に在学中、「新人会」に属し、また「社会思想社」の結成にくわわった。

らの教授であった。

昭和三年（一九二八）すえ、「関東学生社会科学連合会」の神田地区の委員四名のうちのひとりは、伊藤菊治郎（法政）であった。昭和四年（一九二九）すえ、大学・高校・美校・医大の会員は、約六〇〇名。このうち法大生は三〇名と、特高の調査は報告している。(6)

同年の日本共産党の大検挙（三＝一五、四＝一六事件）のさいに、法大生一名が逮捕され（3・15）、ついで在学生一名と中途退学生四名がつかまっている。

	検挙数	起訴	釈放	放校	退学	停学	訓戒
昭和五年（一九三〇）	8	2	6	4	1	2	1
昭和六年（一九三一）	37	4（猶予）	26	1			16

昭和六年はきわだって法大の逮捕者が多いのはなぜであろうか。この年、満州事変が起っており、日本が急速に軍国主義化にむかったから、その反動であろう。

さらに昭和九年（一九三四）から太平洋戦争が勃発した昭和十六年（一九四一）までの間に検挙された法大生数は、つぎのようになる。

	検挙数	起訴	釈放	放校	退学	停学	訓戒
昭和九年（一九三四）	16	7 留保	9			1	6
昭和十一年（一九三六）	11		11				
昭和十五年（一九四〇）	鮮4	鮮2 留保					鮮2
昭和十六年（一九四一）	鮮6	鮮2 留保	鮮3				鮮5

注・鮮とあるのは、朝鮮人学生の意。

検挙された学生は、いずれも治安維持法違反によるものであった。

つぎに学内の研究団体名（左翼系をもふくむ）をしるすと、つぎのようになる。［特高が調べたもの］

団体名称	創立年月日	活動概況
法政大学弁論部	明治45年	関東学生雄弁連盟に加盟している。
法政大学社会問題研究会(7)	大正12・？	北沢新次郎、平貞蔵教授らが指導。
法政大学社会学会	大正14・3	学生社会事業連盟に加盟し、研究会をひらいたり、社会事業団体の見学などをおこなっている。
法政大学政経学会	大正14・4	機関誌『政経志林』を発行し、ときどき研究会、座談会などをひらく。
法政大学新聞学会	昭和3・6	毎月二十三日、「法政大学新聞」を発行。
法政大学政治経済学会	昭和3・12	不定期に研究会、講演会をひらく。
R　S	昭和4・4	この団体は、機関紙『研究前線』を発行。昭和七年五月、「Y友の会」に解消。
法大自由主義研究会（会員四〇名）	昭和5・4	各月に研究会をひらいたり、卒業会員の送別会を開催することがある。
共産青年同盟（法政細胞*）	昭和6・5	
学消　法政支部（会員三九名）	昭和6・6	機関紙『開拓者』を月二回発行。経営主義具体化のために活動している。
自治学生会	昭和7・5	機関紙『学生前線』やビラなどを発行するが、検挙者が出たため活動を停止した。
日本共産青年同盟（法政細胞）	昭和8・1	昭和八年一月、組織再建のため、横山隆らにより準備会を結成。『法政の友』を発行。
ドイツ語会	昭和8・？	ドイツ哲学、文学、語学などを学ぶ。夏休みに合宿がある。
法政大学映画研究会	昭和9・4	合評会、座談会などをひらくほか、ときどき撮影所を見学。
法政大学劇研究会	昭和10・1	ニュース「劇研」を発行するほか、ときどき講演会、座談会などをひらく。
英文学研究会（会員二八名）	昭和10・4	毎週一回、吉武好幸教授が「エリオ・ミル」の論文を講義。
外濠文学会（会員二〇名）	昭和10・5	機関紙『エトワール』を創刊。座談会をひらくことがある。
読書会（名称は不詳）（会員一〇名）	昭和10・11	週一回、東大生らと『日本資本主義の分析』（山田盛太郎著）をテキストとして、下

法政大学政治経済学会（学部）	昭和13・12	宿で読書会をひらく。 不定期に講演会、研究会などをひらく。 ＊〝細胞〟とは、共産党の末端組織。別称は〝ячейка〟（ロシア語で〝細胞〟の意）である。

また設立の年月日は定かではないが、つぎのような研究団体があった。（満州事変がおこった昭和六年（一九三一）から二・二六事件がおこる同十一年（一九三六）までの間にあったものか）。

ドイチュ・イデオロギー		三木　清を中心とする研究会。
経済学批判序説		戸坂　潤を中心とする研究会。
自由主義研究会		豊島與志雄教授を中心とする研究会。機関誌『ラ・リベルテ』を刊行。
文芸研究会		淀野隆三を中心とする研究会。『十九世紀欧州文芸思潮史』（用書？）。
二水会		唯物論研究会法政支部。
カウツキー研究会[8]（科学主義研究会）		京大の滝川事件を契機として結成された。
大学自由擁護連盟		「大学自由擁護連盟」法政支部の発展したもの。
日本資本主義分析研究会		相川春喜を中心とする研究会。
農業問題研究会		
科学研究会		

注・郡山澄雄「わたしの法政時代」――盛んだった研究活動　孤独を救った友人と師」『法政大学新聞』所収、昭和28・11・11を参照。

昭和四年（一九二九）は、共産党の大検挙（四＝一六事件）や東京市電のストライキ、世界恐慌がおこった年であった。年のくれの十二月四日――法大生は、軍事教練、反動政治、帝国主義戦争などに反対するビラをまき、物議をかもした。

それは近衛歩兵第一旅団の営庭（兵営内の広場）で、軍事教練の査閲がおこなわれる直前におこった。田安門のまえに、不穏なビラ数枚がまかれた。その文面は、つぎのようなものであった。

軍教其の他一切の反動政反対！
帝国主義戦争反対！
査閲をボイコットしろ！
日支・日鮮・日台の学生団結万歳
反帝同盟万歳
反帝同盟法政班

不穏文書をみつけた配属将校はびっくりし、大学側と協議し、とりあえず麹町署に依頼し、学生がのりおりする主なる駅と道路などを警戒させた。

学校当局は、教練の主旨をよく理解しているので、不穏分子の発見につとめ、犯人をみつけしだい、ただちに放校処分に附する方針だとのべた。

昭和五年（一九三〇）から翌六年（一九三一）にかけて、法大生による情宣（情報と宣伝）活動がさかんになり、ビラまきが活発化した。国内的には、不況が深刻化し、企業による人員整理、賃金カット、労働強化が進行した。軍部や右翼団体は、ファシズム体制を確立し、対外進出をさけび、やがて満州事変（侵略戦争）がおこった。

昭和五年――学内の研究団体は、講演会をひらき、檄文（大衆につげる文書）をとばした。

弁論部の講演会・座談会……新館講堂において、戦旗社（東京麹町三番町二八にあった出版社。大衆雑誌『戦旗』を刊行）の幹部・山田清三郎、

藤枝丈夫をまねいて講演会を開催（2・1、午後一時から四時半まで）。のち座談会を神楽坂の「東洋軒」でひらいた（午後六時～八時半まで）。新興文学講演会……「文芸評論会」は、講堂において講演会をひらいた（4・26）。聴衆は約百名。講演者は大宅壮一、小林多喜二、三木　清らであった。

全国の各大学、高等専門学校の代表による弁論大会がひらかれた（10・4、正午より午後四時半まで。聴衆は約二五〇名）。戦旗社の法政支局の責任者は、楠　幹（予科二部の一年生）であるが、中野署に逮捕された。同人を取調べた結果、平田喜一郎（予科一部）が、無産青年および労働新聞の法政支部の責任者であることが判明した。

〝ビラ〟散布事件としては――

資本家地主の建国祭を葬（ほおむ）れ！

革命的代議士を議会へ送れ！

全法政の学生諸君に檄す

（これは〝赤紙〟に印刷したもの）

6・26学内に配布。

東京商大（現・一ツ橋大学）のキャンパスにおいてビラまきをやっていた村沢武彦（法大生）は、錦町署に引致（いんち）（ひっぱられ）取調べをうけた。大阪市天王寺公会堂において、法政大学と関西大学対抗の「学生講演会」が開催された（10・12）。聴衆は約七〇〇名。このとき法政の幡野周飛蘭は、「法律の階級性と法学徒」と題して、また関学の水野政成は、「資本家的社会政策の批判」といったテーマで、講演しようとしたが、論旨不穏のかどで中止を命じられた。

法大弁論部主催の「全国学生雄弁大会」が、講堂でひらかれた（11・22）。聴衆は学生が約一三〇名、一般が二〇名。弁士のなかに過激な演説をした者がいたという（特高の報告）。

昭和六年（一九三一）も、社会運動やビラ配布がすくなからず起った。年明けに、戦旗社に出入りしていた柴田武二（法大高等師範部国漢科生。今市（いまいち）中学校出身）が、郷里の栃木県において、非合法の左翼労働組合を組織しようとして逮捕された。

法大のR・Sは、学内にビラをばらまいた（2・9）。また法政大学読書会連盟は、メーデーに関して赤と白の紙に、――

明日は学校をサボってメーデーへの参加あるいは参観の後に、直ちに懇談会をもって、その経験と力を直ちにおれたちの当局に対する闘ひに激発させろ！　R・Sに加入して、その指導により、しこうして労働者農民の闘争との結びつきの下に……

といった文を書いたのち、つぎのようなスローガンをかかげた。

学校の営利化絶対反対！

反動興行訪欧飛行絶対反対！

メーデーを通じてR・Sの拡大強化万歳！

被圧迫階級の解放万歳！

注・これらのアジビラは、メーデー（5・1）前後にまかれたものか。

また軍事教練に反対する学生は、

野外演習絶対反対

軍教費（軍事教練の代金）五円を撤廃せよ

のビラを学内にまいた（6・2）。

昭和八年（一九三三）は、ファショ的風潮がつよまり、京大の滝川事件（鳩山一郎が文相のとき、京大法学部教授・滝川幸辰の著書『刑法読本』ほかが、赤化思想であるとし、同人を罷免した）がおこった。以後、学問の自由はうしなわれた。プロレタリア作家・小林多喜二が虐殺された。

滝川問題に関連して、昭和八年九月下旬――明治大学体育館地下室ホールにおいて、極秘裡に「大学自由擁護連盟」の関東委員会をひらこうとしたとき、学生十名（東大一名、東京商大一名、明大三名、法政大三名、大正大一名、東洋大一名）が検挙された。このうち三名をのぞき、取調ののち即日または翌日釈放された（極秘　昭和八年十月編　彙報　第二十七号　文部省学生部）。

昭和十年（一九三五）十一月ごろ、法大生七名（うち三名は予科生）は、東大生らと読書会を組織し、下宿または弁論部室において、山田盛太郎[9]著『日本資本主義分析――日本資本主義における再生産過程把握』（岩波書店、昭和9・2）をテキストとして研究会をおこない、またあるときは東大生に講演をなさしめた。

読書会が発覚したことにより、大学当局は、昭和十一年二月二十二日付で、つぎのように処分した。

無期停学……二名　譴責（けんせき）処分（過去をせめ、将来をいましめ）……三名　訓戒（さとしいましめる）……三名

昭和十一年（一九三六）は、二・二六事件がおこり、日独伊防共協定が締結された年である。この年、メーデー禁止令がでた。同年一月下旬、法大生七名（うち三名は予科の生徒）が検挙された。

一　法政を追われた教師たち

大正十五年（一九二六）の春――法政大学から赤化教授を一名だした。文学科、哲学科において「社会政策」を担当してきた小林輝次教授（一八九六～一九八九、社会運動家・経済学者）は、京大の河上門下であり、「京大労学会」（大正7設立）の創立者のひとりであった。[10]「政治研究会」（明治から昭和期の社会主義者・山川　均（ひとし）［一八八〇～一九五八］が提唱した――無産階級運動の方向転換論――を具体化したもの）の中央委員に選出された。

また同人は野坂鉄の「産業労働調査研究所」や、「日本フェビアン協会」の創立にも関係したほか、東大セツルメント労働学校で、経済学を講じた。[11]小林は奇行の多いひとであったらしく、大正十一年（一九二二）から十三年（一九二四）にかけて兵役に服した。しかし、入営中に社会主義者として、過激の言動があった。学内では「社会思想」の同人――平貞蔵、友岡久雄教授と、思想的、感情的にも対立していた。

小林のかなり常軌を逸した言行や不人気などが学校当局に知れ、ことに学外における活動について松室学長にとがめられ、[12]大正十五年四月、退職を願いでた。が、じっさいは左翼教授として法政から辞職を強要された。戦後、日本共産党に入党したが、部分的核実験停止条約を支持し、のちに処名されている。

昭和五年（一九三〇）五月、哲学科の教授・三木　清は、「プロレタリア科学研究所」で知りあった小川信一（一九〇二～一九九一、昭和期の評論家。プロレタリア演劇・芸術運動にくわわる）にたのまれて渡した金が、共産党の資金であった理由で（治安維持法違反）逮捕された。数日後、釈放されたが、七月になって共産党シンパサイザーとして起訴され、豊多摩刑務所に収監された（第一回事件）。判決は、有罪懲役一年――執行猶予二年。この事件により三木は、法政を追われ、日大や大正大学の非常勤講師の口もすべてうしなった。『大正大学一覧　昭和五年度』

（大正大学、昭和5・11・15）には、

昭和五年七月十二日退職　　講師　三木　清

とある。三木については、後述する。

前述の小林教授は、法政大学経済学部のはじめての受難者であった。

昭和八年（一九三三）には、経済学部創設者のひとりであった平　貞蔵教授（一八九四～?、労働運動家。三高をへて東京帝大法学部政治科を卒業。大学院をへて法政の教員となる）が、また翌九年（一九三四）には小西憲三教授の退職をみた。平は大学の財政運営をめぐっての学内対立から辞職したようだが、真相はどうであったのか。

昭和十二年（一九三七）には、日中戦争がおこり、翌十三年（一九三八）に国家総動員法が発動し、近衛は東亜新秩序の声明を発表した。昭和十三年二月一日――「人民戦線」（反戦、反ファッショの連合統一戦線）を組織したとして、いわゆる〝労農派教授グループ〟として法政から――

人民戰線派に第二次鐵鎚

官私大の教授等九名

大内、有澤、美濃部ら中堅學究

今曉全國に總檢擧

美濃部ら教授グループの逮捕を報じる
『東京朝日新聞』昭和13・2・2付。

阿部　勇教授（一九〇二～?）……［六本木署］東京帝大経済学部の助手をへて現職。

美濃部亮吉教授（一九〇四～八四）……［田無署］東京帝大経済学部の助手・講師をへて現職。

南　謹二教授（一九〇四～?）……［荏原署］東京帝大経済学部を卒業後、国際労働局東京支社に勤務し、のち法大教授。

笠川金作（高等商業部講師）……［伊勢佐木署］巣鴨高商教授。

らが、治安維持法違反で検挙された。

三木は人民戦線派の第二次検挙をどのようにおもったのか。その日記に、「知人が多いので驚く。全くひどい世の中になったものだ」（2・1、

火）としるしている。

コミンテルン（「共産主義インターナショナル」の略）の反ファシズム人民戦線の指示をうけて活動したという容疑で、検察当局は、昭和十二年十二月十五日――全国十八府県にわたって約四〇〇名の一大検挙を断行した。このとき加藤勘十（無産党委員長）、鈴木茂三郎（書記長）、学者では向坂逸郎・猪俣津南雄らが逮捕された（人民戦線事件［第一次］）。

当局は取調べをおこなった結果、これらの一派と脈絡あるものが検束されずにいる事実を知り、極秘裡に内偵をすすめ、昭和十三年二月二日――各府県と緊密な連絡をとって一せい検挙にふみ切った［第二次］。

逮捕者では――

東京で十六名

全国で三十八名

におよんだ（『東京朝日新聞』昭和13・2・2付）。

このとき法政では、三教授一講師の検挙をみたのであるが、学校当局の対応はどうであったのか。昭和五年（一九三〇）、同七年（一九三二）左翼シンパの容疑で逮捕された三木　清、戸坂　潤の前例からみて、犯罪の確定をまたず、事件の真相が判明しだい、「解職」その他の処断にで、あとは文部省に報告するだけとみられた。

小山松吉・法大総長は、じぶんの学校から教授らが四名も検挙されたことに動揺をかくすことができなかったようであり、つぎのような談話を発表した。

――人民戦線派の検挙にさいして、法政大学の教授が検挙されたといふことは、新聞社からはじめて聞くまで、私もぜんぜん知らなかった。学校からも何の知らせもない。もちろん検挙された教授たちも個人的な立場にもとずくもので、学校としても知る由もない。

しかし、教授の地位にある者が検挙されたとなれば、その事情、こんごの当局の調査の模様をよく究めて、善処せねばならぬ（最もよい方法でとりはからう）と思ふ。

けっきょく大学当局は、逮捕の翌二月二日付で四人を休職とし、十月公判のとき解職処分とした、と『法政大学80年史』（四七一頁）にある。が、じっさいはどうであったのか。

このとき馘首（解雇）された美濃部亮吉（昭和7年～13年まで、六ヵ年勤めた）の証言とこれはだいぶ相違がある。

――法政は、ただちに私達を首にした。検挙されるのと殆んど同時だったと思う。有罪か無罪かも分らないうちに、たちまち首を切られたわけである。

美濃部は私学の経営のむずかしさをわかっていたようだ。学生がたくさん来なければ成り立ってゆかぬのが私立大学なのだから、労農派に関係があるという嫌疑をかけられただけで首にするのは当然の処理だったかとも思った。

しかし、首になったとき、美濃部は法政の冷酷の処理を大いに憤がいした（「ベルリンで受けとった採用通知」『法政』第8巻第12号所収、昭和34・12）。

三木　清が法政を追われたあと、京都より上京し、法政大学講師となったのは戸坂　潤であった。昭和六年（一九三一）四月のことであり、阿佐ヶ谷三ノ二五〇に住み、十二月イクと結婚した。ときに戸坂は三十一歳であった。かれは三年後の昭和九年（一九三四）一月、法政の学校騒動がおこったとき、予科教授一同とともに辞職し、（本人いわく、「私自身も騒動で半分やめ」）、同年八月文学部を思想不穏のかどで免職になった（本人いわく、「後の半分は右翼新聞の注文で、大学当局が無理にやめさせた」（「免職教授列伝」））。その後はもっぱら著述によって生計をたてた。

戸坂は昭和十三年（一九三八）、いわゆる「唯物論研究会事件」に連座し、検挙された。唯物論研究会」（以下、〝唯研〟とする）の創立の話は、昭和七年（一九三二）四月ドイツ留学から帰った三枝博音（当時、成渓高等学校教授）と知人との会話のなかから生れたもので、仲間を誘ってしだいに大きくなった組織であった。

三枝はもともと哲学畑のひとであり、唯物論的立場からヘーゲルの弁証法（第三の解決法をみいだす方法）を研究していた。が、ドイツ滞在中に見聞した学会の動向に刺戟され、帰国後、哲学・科学の両域にわたる唯物論研究会をつくろうと思った。まず同志をあつめねばならず、個人的な友人関係者に声をかけ、さらにその友人を誘い、だんだんにその数をふやしていった。

発起人として、つぎの在京者六名があつまった。

三枝博音（一八九二～一九六三、唯物論的思想家。著述活動をつづけるかたわら鎌倉アカデミアの校長）。

岡　邦雄（一八九〇～一九七一、昭和期の科学史家。ペンネームは小山謙吉。東京物理学校をへて一高助教授。戦後、鎌倉アカデミアの教授）

戸坂　潤（一九〇〇～四五、昭和期の哲学者。法大講師）
服部之総（一九〇一～五六、昭和期の歴史家）
本多秋五（一九〇八～二〇〇一、文芸評論家、ペンネームは高瀬太郎）
永田広志（一九〇四～四七、マルクス主義哲学者）

これらの主要メンバー六名は、左翼系学者・思想家であり、岡をのぞきすべてプロレタリア科学研究所の所員であった。

かれらは昭和七年（一九三二）五月下旬ごろから、月に一、二回、岡が勤めていた文化学院の職員室、三枝が関係していた「皇漢医学　中山研究所」（牛込区若松町十二）の一室において会合をかさね、本会創設の趣意、目的などを概述した文書をつくり、国内の自然科学者、哲学者、歴史家などに発送した。その結果、三十四、五名の賛同者をえることができた（岡　邦雄の手記「唯物論研究会に対する認識」於　麹町警察署　昭和14・4・18を参照）。

法政を免職になったのち、戸坂は唯研の事務長となり、組織活動と著述に専念したが、昭和十二年（一九三七）末には執筆禁止となっており、唯研も翌十三年（一九三八）二月解散に追い込まれた。

唯研の本質、本当の目的はなんであったのか。戸坂みずから当局者につぎのように説明している。

――この唯研というのは、共産主義の基礎理論であるマルクス、エンゲルス、レーニンの弁証法的唯物論を基調（テーマ）とし、自然科学・社会科学・哲学・芸術・文化一般の研究をおこない、その理論的成果を大衆にむかって啓蒙することを目的とする、と。

と同時に、これをもって日本共産党の拡大強化に資することを目的とする、左翼文化団体である、とのべている。組織的には直接党に従属しないが、大衆に共産主義の基礎理論を啓蒙することを任務とする党の同伴的団体である（於　杉並警察署　戸坂　潤　昭和14・5・8）。

戸坂は昭和十三年（一九三八）十一月、検挙され、同十五年（一九四〇）五月まで留置場（警察署内）ですごし、のち拘置所（未決囚を収容する施設）に移され、十二月保釈になった。昭和十九年（一九四四）三月、懲役三年の刑が確定、九月一日東京拘置所へ下獄。翌昭和二十年（一九四五）五月、空襲のため長野刑務所に移され、同年八月九日そこで獄死した。享年四十五歳であった。

昭和十九年（一九四四）には、法大教授

留岡清男（一八九八～一九七七、昭和期の教育家。同僚の城戸幡太郎と「教育科学研究会」を結成、雑誌『教育』を創刊）
城戸幡太郎（一八九三～一九八五、昭和期の教育研究家。戦時下、科学性と合理性にもとずく教育研究の道をもとめた）

ら二名は、治安維持法違反容疑で拘禁された（留置場にとじこめられた）。

両人は教育界における、指導的人物とみられていた。当局がみるところ、「教育科学研究会」なるものは、「プロレタリア教育ノ　人民前線的形態ニシテ　雑誌『教育』ノ編集部ヲ拠点トシテ活動シ来レルモノ」であった。

同年、竹内賀久治総長（校友、弁護士、国土社［右翼団体］の幹部）は、大学財政の緊縮を理由に、[13]

高橋茂教授（昭6～19在任）
亀島泰治教授（昭和9～19在任）

の辞任をもとめた。両人は給料の支払いを停止され、退職に追いこまれた。

一　三木　清はなぜ法政にきたのか

マルクス主義哲学者として衆目をあつめていた三木が、終戦の年獄死したことはよく知られている。筆者が三木　清の名をはじめて知ったのは、高校生のときであり、同級生が「この学校にいる三木先生（繁）は、その弟だ」と、話していたのを耳にした記憶がある。当時筆者は知的に発達不全であったし、哲学などに関心はなく、あゝそうなのかぐらいにしか思わず、話を聞きながした。が、後年、本人（繁氏）と会う機会がたびたびあり、兄の清に関する興味あるエピソードを聞くことができた。

たとえば、京大の院生であったとき、三木が、波多野精一（一八七七～一九五〇、明治から昭和期の哲学者。京大の宗教学教授）の推挙によって、岩波茂雄の出資をうけ、ドイツ留学に旅立ったのは大正十一年（一九二二）五月のことであり、帰国したのは三年半後の同十四年（一九二五）十月のことである。が、そのころのドイツはマルクがひじょうに安い、超インフレ時代であったから、外国紙幣のおかげで、為替の余沢にあずかり、書物はいくらでも手に入った。

ときどき日本に送られてくる大きな木箱をバール（鉄てこ）で開けると、その中に洋書がぎっしりと詰まっていた。帰国後、清は弟の繁[14]と東京の借家でいっしょに暮らしたことがあったが、清はいつもタバコを口にくわえ、洋書をよんでいたという。

また明け方に特高に踏み込まれたとき、弟の繁は玄関の間で寝ていたのだが、

――ここにいる。

と、兄と見まちがえられ、連行されようとしたら、

――奥にもう一人いる！

と、いって清がひっぱられた。

繁は兄の清と顔といい、体つきといい、ひじょうによく似ていた。繁は東大のイチョウ並木を歩いていたら、清とまちがわれよく学生からあいさつされたという。

わが国の西洋哲学研究の学的水準は、世界の哲学輸出国――ギリシャやローマ、英仏独のレベルにとおく及ばないであろう。が、日本人は外国から海をこえて渡ってきたこの学問にこ従することにうしろめたさを感じることなく、現実ばなれした観念の世界にあそんでいる。外国の哲学者や研究者の著述に習い、その説をうけついだり、それを参考とし、じぶんの創見のごとくものを発表する。そういうまやかしの研究がまかり通っているのが、わが国の西洋学の世界であるらしい。

三木が書いた論文のなかに、ドイツ文献名を明かさないものが多々あり、ドイツ文がよめるある女性がそれに気づいた話を、筆者はどこかで読んだ記憶があるが、いま思いだせない。

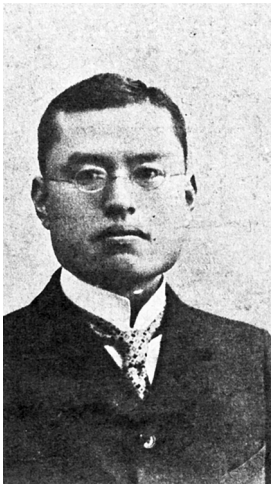
筆者には三木哲学のよしあし、その卓越性について論ずることはできないが、かれは少年のころから勉強のよくできる、いわゆる学校秀才であったらしい。京大生の三木を指導した波多野精一は、かれがじつにみごとな試験答案を書いたことにおどろいている（「三木　清君について」）。

波多野は、哲学専攻（「純哲」）の三木のおどろくべき学才と学殖に驚嘆し、その知識と理解力の広さ、深さに肩を並べる者はひとりもいない、と絶賛した。人はまわりからほめそやされると、ついその気になり、じぶんを買いかぶってしまう。波多野は、三木がつけ上って高慢になる性格をよくしっていた。[15] 自信まんまん、おごり高ぶっていると必ず落し穴にはまるものである。三木が京大教官の口を拒否されたのが、そのよい例である。

大正十四年（一九二五）十月、ドイツ、フランス留学から帰った三木（二十八歳）は、京都市左京区浄土寺西田町に下宿をさだめ、パリ以来のパスカル研究を継承するかたわら、京大関係者と、アリストテレスの『形而上学』の講読会をひらき、その指導にあたった（「年譜」）。

三木の京大入りの人事は、かれが帰国するまえから水面下でうごいていたようである。

大正末年から昭和初期に入ったころの京都帝大の哲学科（明治39・9開講）の陣容（教員、担当科目など）は、左記のようであった。



波多野精一

教授	西田幾多郎（一八七〇～一九四五）	哲学	明治43年京大哲学科助教授。大正2年教授。昭和3・9　退官。
〃	松本文三郎	インド哲学史	
〃	高瀬武次郎	シナ哲学史	
〃	朝永三十郎（ともなが）（一八七一～一九五一）	西洋哲学史	東京高師講師をへて、明治40年京大助教授。大正2年教授。昭和6・3　退官。
〃	藤井健治郎（一八七二～一九三一）	倫理学	早大教授をへて、大正2以後、京大教授。昭和4・4　文学部の学部長となる。
〃	小西重直	教育学教授法	
〃	深田康算（やすかず）	美学美術史	
〃	波多野精一（一八七七～一九五〇）	宗教学	東京専門学校（現・早大）講師からドイツ留学をへて、大正6年京大教授。
〃	米田庄太郎	社会学	
〃	野上俊夫	心理学	
助教授	田辺　元（はじめ）（一八八五～一九六二）	哲学	東北大講師をへて、大正8年京大助教授。昭和2・11、西田のあとをおそい教授となる。
〃	和辻哲郎（一八八九～一九六〇）	倫理学	大正14年京大助教授。昭和6・3　教授となる。

〃　天野貞祐（一八八四～一九八〇）　西洋哲学史　（大正15・8　学習院教授より、京大に移る。昭和6・3　教授となる。）

岩井勝二郎　心理学

羽渓了諦　宗教学

注・『京都帝国大学史』昭和18・12を参照し、手を加えまとめたもの。

大正十四年（一九二五）三月――三木がドイツからパリに移り、パスカルについて論文をかき、それを『思想』に送っているころ――西田幾多郎は、三月八日の午前中、朝永三十郎（一八七一～一九五一、明治から大正の哲学者。西洋近世哲学史研究の先駆者）とともに波多野精一（一八七七～一九五〇）宅をたずね、「例の問題（人事？）を話し」た。西田は、哲学科にもう一講座ふやしたいと思っていた。

西田は若いひと（三木［一八九七～一九四五］のことが念頭にあった？）か天野貞祐（一八八四～一九八〇）か、とはいわず、両方（バイデ）（若者と年上のもの）を採りたいというようなことを波多野にいった。波多野の口からは、三木のことは一言も出なかった。かれは天野を迎えることには、はっきり不同意とはいわなかったが、たいへん不満のようすが感じられた。

天野は京大でカント哲学を専攻した者だが、波多野はかれの学問はせまいといったし、近世哲学史をやるばあい、ラテン語やフランス語の素養が必要なことをいった。西田はなおよく考えてほしい、といってわかれた。

同日の午後、こんどは波多野が西田宅（田中飛鳥井町三二）にやってきて、天野の学問上の不足は、他をもってこれを補うということにしたい、といい、相談はまとまった（田辺元宛西田書簡3・8付）。

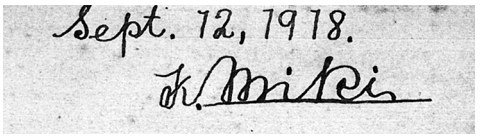
かくして大正十四年（一九二五）は、十月に三木の帰国をむかえ、またたく間にすぎ、十五年（一九二六）となった。

大正十五年（一九二六）四月から、三木はふたたび非常勤講師として教壇に立った。ときに二十九歳。出講先と教科は、つぎのようであった。

第三高等学校　哲学概論。

竜谷大学　フッサールの『Logische Untersuchungen（ローギッシェ ウンターズーフンゲン）論理学研究』。

三木　清



欧文による三木の署名

京大法学部　　ヘーゲルの『エンチクロペディー』の講読。

同年六月、処女作『パスカルに於ける人間の研究』（岩波書店）を刊行した。この年の十二月大正天皇が死去し、年号がかわり昭和元年となった。

十五年＝昭和元年（一九二六）の暮れもおしつまったころ、三木は竜野中学の後輩で、当時京大の医学生であった坂田徳男という者と百万遍にちかいミルクホール（パン、ケーキ、牛乳などを出す飲食店）で、ミルクをのんでいたとき、こんなことをいった。

――こんど京大文学部哲学科宗教学の助教授になることに内定したのだ。

聞いた当人は、そうかと思った。が、後日三木が突如東京へ去り、法政で教鞭をとることになったことを知り、いささかあっけに取られた（坂田徳男「三木君の思い出」『三木　清全集』第7巻　月報　所収、昭和42・4）。

同年十二月のある日の夕方のことである（梯は昭和二年［一九二七］二月のある日、といっているが、これは誤りであろう）。

梯（かけはし）明秀（あきひで）（一九〇二～九六、昭和期の哲学者。一高をへて当時、京大哲学科の学生）は、ゼミに出席するために大学の正門に入ったとき、三木が悄然（しょうぜん）とした（しょげた）姿で、時計台の右側のほうから歩いてくるのに出会った。

――どうでした？

と、梯はたずねた。

――いや、だめだった。

と、三木は一言つぶやいた。そのとたん梯は、

――そのほうが、かえってよかったのじゃないですか。

と、不用意にいってしまった。

三木は意表をつかれた顔をして、

――ええ？

といって、相手の顔をみた。

三木はべつに怒っていなかったので、それだけで別れた（梯　明秀「三木さんと、私の学生時代」『三木　清全集』第三巻　月報　所収、昭和41・12）。

人事や選挙はみずものであり、運に左右されやすく、予想が立てにくいものである。

三木の京大入りは、ひともうわさし、本人もそうなるものと思っていたようである。が、教授会において推すものがいなく、今回も不首尾におわった。かれの見込みは大いにはずれた。

翌昭和二年（一九二七）一月六日（木）、十一日（火）とつづけて、夜三木は、西田幾多郎教授宅をおとずれている。

1月6日（木）　夜三木来る。かれの為に忠告
〃　11日（火）　三木来る　東京行に決心せりといふ
〃　29日（土）　集会所にて卒業生予餞会（送別会の意）
三木の送別会　天野（貞祐）の（新任）歓迎

注・西田日記（『西田幾多郎全集　第十八巻』所収、岩波書店）より。

西田の日記にみられる「かれの為に忠告」とか「東京行に決心せりといふ」ことばは、何を暗示しているのか。

これは意味深長なことばである。前者は、相手のわるい点を指摘し、直すようにいったことであり、後者は三木が京都をはなれる決断をしたつよい意志表示をあらわすものであろう。

かれが大方の予想をうらぎって京大に容れられなかったのはなぜか。そのころ京都で三木のまわりに悪評がうずまいていた。[16] 本人はそれに気づいていたのかいなかったのか、かれはいっこうに気にせず行動した。新進気鋭の哲学者としてジャーナリズムでもてはやされていたから、その身

辺にはいつも若い哲学徒があつまっていた。悪くいえば、三木は教祖的なリーダーではなかったか。

まわりから崇敬の念をもって接しられるうちに、本人もいい気になり、勢いのよいことをいうようになり、人のよしあしを批評したようだ。毎月、一回か二回「哲学会」がひらかれた。それはふつうの哲学研究会というよりは、ビールをのむ会であり、お互い談笑するゆかいな会であった。

三木は酒がのめた。かれは酒をのみながら談論した。話がいよいよ佳境に入ると、ビールのあわとともにつばが向う側の席まで飛んでいった。

「哲学会」の参加者の脳裏にふかく刻まれていたのは、留学中の研究過程についての土産話というより、全国の各大学で教鞭をとっている有名な哲学教授についての品評会——人物評論——学風批判であった。三木は、手あたりしだい、

——あれはえらい。

——これは情けない。

といった風に、批評というより、悪口にちかいやり方で、あれこれ品評した。[17]

その中には先輩にたいして失敬な批評もあったようである。

三木の人物ないしは、学風の評価には、一定の基準があったという。かれは大学の講壇哲学に、いろいろ不満や反発を感じていたようである。大学の講壇に立って講義をおこなう微温的な生気のない哲学者を、三木は嘲笑的に二つにわけた。

だめな学者……西洋哲学（思想）の単なる移植紹介者。[18] 独創的でないもの。

価値ある学者……新たなる立場を築いている独創的な学者。学者としての生命（いのち）が、現実社会に根をおろしているもの。

三木は西田と波多野を高く評価し、本心からそういったかどうかわからないが、「何といっても西田、波多野両先生は世界的哲学者だよ」と、京大の構内をあるいているとき、こう然といったという（坂田徳男談）。

口はわざわいのもと、というが、悪口雑言（あっこうざつごん）というものは、ふしぎなことに、いつかいわれた当人の耳に入るものらしい。

三木の遠慮会釈のない人物評価は、じぶんの自信のあらわれであったのであろう。若いころの三木は、心から名声に執着し、野心にもえていたという。これはじぶんの力量と使命とについていだいていた強烈な自信のほどによるものであった（林　達雄「三木　清の思ひ出」）。

大正十四年（一九二五）十二月十六日の教授会において、京大哲学科の新任人事は、二人ないし三人の候補者をめぐってどうじ進行したものか。三木はおそらく停年まじかの西田の後任として、その名があがったかも知れない。務台理作（一八九〇～一九七四、大正・昭和期の哲学者。西田の弟子。三高、同志社女専講師をへてドイツに留学）の名があがったが、波多野がはげしく反対し、見あわすことになった。

朝永の後任として、天野の人事だけが教授会を通り、決定した（公式の発令は、大正15年8月）。年くれのこの日の教授会は、三木が帰国して約二ヵ月後のことだった。

教授会でどのような話が出たものか、想像するしかないが、朝永教授は中立であったろう。波多野は三木の名をあげ、支持したであろうが、西田と田辺は消極的であり、あと押ししなかったということであろう。けっきょく三木は候補からはずれ、宙にういた形になった。

大方の予想に反して三木が任用されなかったということは、物議をかもしたであろう。何よりも本人にとって一大の痛恨事であったはずである。教授会の雲ゆきがかれに不利に働いたには、いくつか理由が考えられた。

一　私生活に関するうわさ

一　同僚となる者のねたみ

後年、京大で教鞭をとるギリシャ哲学の田中美知太郎（一九〇二～八五、法大・東京文理大講師をへて、昭和22年［一九四七］京大助教授、同25年［一九五〇］教授）によると、私行上のことだけでは、ふつう排除の決定的な理由にはならないという。『パスカルに於ける人間の研究』（岩波書店、大正15・6）に示された三木のはなばなしい活躍に、まだ若かった助教授の田辺元（当時、四十一、二歳）は、「油断のならぬライバルを意識させ、それが各種の中傷をうけいれやすくしていたのかも知れない」（田中美知太郎著『時代と私』文藝春秋、昭和45・4、七〇頁）。

また才知において断然他を圧していた三木は、嫉視（ねたみ）や反感の的となり、中傷されたのかも知れない。

私生活に関するものは、醜聞（聞きくるしいうわさ）であった。というよりは公然の秘密であり、哲学科の教員らにもあるていど知れわたっていた。それは女性問題であった。

三木には、かれみずからが〝シュタイン夫人〟と呼ぶところの女性がいた。シュタイン夫人（一七四二～一八二七）とは、ドイツ・ヴァイマール公国のフォン・シュタイン男爵夫人のことで、十一年以上もゲーテと親密な関係があった女性のことである。三木が失恋して、失意のどん底にあったとき、かれの慰め手、かれの生活設計の破壊者として現われたのは、その女性であった（林　達夫「三木　清の思ひ出」）。

それはいかなる素性の女性であったのか。その女性のことをもっともよく知る者は、――

谷川徹三（一八九五～一九八九、昭和期の哲学者。京大を出て、昭和三年［一九二八］法政大学教授）

同夫人（旧姓・長田多喜子）

林　達夫（一八九六～一九八四、昭和期の評論家。一高をへて京大選科を出る。のち法政大予科講師、東洋大教授）

らであった。

林の女友だちは、のちに谷川夫人となる長田多喜子であった。かれの妹が多喜子と同志社の女学校で友だちであった。[19] 彼女は京都府選出の代議士の娘であり、家は郊外の淀（よど）にあった。同志社の英文学部を出ているピアニストであり、東京の音楽学校をやめ淀へもどり、京都の病院に胸の病気で入院している姉の看護をしていた。

シュタイン夫人

ちょうど三木が京大から第一高等学校の記念祭に贈る歌をつくり、その作曲をこのピアニストにたのんだ。やがてこのことが縁となり、三木はその女性に恋愛感情をいだくようになった。作曲はとくべつすばらしいものではなかったが、三木にとってそれが恋愛のはじまりになればよいと思ったようだ。

ピアニストは、三木の求愛をやんわり拒否したようである。なぜなら彼女は谷川との恋愛が進行していたからである。三木がたのんだ作曲は、結果において〝恋愛葬送曲〟もしくは〝遁走曲（フーガ）〟になってしまったのである。

林の女友だちのこのピアニストは、じつは三木のシュタイン夫人の娘のピアノの先生でもあった。傷心の三木の心のなかに入ってきたのはシュタイン夫人であった。フルネームはわからないが、名前は藤江といい、子供が三人ある未亡人であった。

長女……例のピアニストが、その先生。

長男……林の中学校時代からの友人。

次男……三木がその家庭教師。

藤江夫人は、学問好きの未亡人であった。三木は当時京大の院生――特別給費生であった。家庭教師として藤江家に出入りするうちに未亡人と親密になったものであろう。三木ははじめはすくなくとも受身的であったが、やがて溺れるようになり、ついには林にその情事をとくい然として誇示するまでになった。

三木のあからさまの話を聞いて、林はかれにたいする友情が急速にさめてゆくのをどうすることもできなかった。三木はもっとも有力なる、将来の教授候補者であったが、人事がおこるまえ、文学部の部長をしていたF教授（不詳、藤井健治郎［倫理学］か深田康算［美学美術史］のことか）は、林の自宅（西洞院通り中立賣）にやってきて、三木の行状について三十分ほど訊問した。

F教授は林の父の友達であり、また達雄の保証人でもあった。京大の選科生となるにさいして世話になった人である。林は相手の質問にありのまゝに答えざるをえなかった。林がかたる話は、三木にとって不利な証言であった。京大の講座をうることに汲々たる執着をもっていた三木にとって、やはり藤江未亡人とのスキャンダルは致命的であった。

もうひとつ三木には、金にまつわる黒いスキャンダルがあった。かれがドイツ、フランスの留学をおえて帰国したのは大正十四（一九二五）十月である。翌十五年＝昭和元年（一九二六）四月に三高や私大の非常勤講師をはじめるまで、約半年ほど原稿料をのぞくと定期的収入がなく、のらくら暮らし、下宿で仲間とアリストテレスの『形而上学』の講読会をもっていただけである。

大正十五年三月二十五日――この日、西田は第三高等学校校長・森　外三郎（一八六五～一九三六、大正十一年～昭和六年まで校長）と会って、三木（二十九歳）にまつわる話をしている。

（前略）外の話はとにかく　三木が帰る時　藤江から五六百円の金をもらったといふ件は　森君（森　外三郎のこと）が藤江の未亡人自身の口から聞いた話で　どうしても三木の嘘としか思はれませぬ　私に対して一も二もなく否定してゐた彼の態度を遺憾に思ひます（田辺元宛西田書簡――大正15・3・25付）。

「三木が帰る時」とは、いつどこへ帰るときなのか。この文章だけではよくわからないが、これはおそらくヨーロッパから帰国するときのこと

をいっているのであろう。藤江未亡人から、いまの金にして二五〇万円（？）もの大金をもらっている。これは何のための金であったのか。三木の生活や研究を助成するための金（書籍代）であったのか。いずれにせよ使途不明の金である。

また三高の校長と藤江未亡人との接点が不明である。なぜ彼女が森校長と会って、金を三木にあたえたことを語ったのか。ふかい謎としてのこる。

三木の人事の結果は、前年の大正十四年十二月と翌年十五年くれの教授会においてはっきりと出ているが、三木は友人らの勧誘にもかゝわらず上京もせず、長いこと京都にぐずついていたのは、かれらからみれば、まったく見込みのない一るの望みをむなしく京都大学につないでいたからである。

西田も三木の人事の件では後悔し、また内心忸怩たるものがあったはずである。しかし、「いまのような有様ではどうも大学へというわけにはゆかず」（田辺元宛書簡――大正15・3・4付）といい、わたしもこれまでの心的態度をすてる必要があるといっている。

三木がこんな人間になったことにじぶんも責任がある、と。三木をよい人間にするために、まごころをもって忠告してみたいといっている。

三木は問題の金をもらっていない、と西田にいったであろうが、西田は信じなかった。この先生は他人にたいしてきわめて寛容であったが、虚偽（うそ、いつわり）とか偽善（みせかけの善事）にはがまんがならず、激怒することもあった（天野貞祐「西田先生のこと」『現代人生論全集1　天野貞祐集』所収、雪華社、昭和41・10）。

だから西田は三木をしりぞけ、いったん京都を去らしめたほうがよいと判断し、そういう意見を波多野にのべた。が、三木を東京へやることに波多野は同意しなかった（田辺元宛西田書簡――大正15・11・4および11・8付を参照）。

ところで三木は、例のシュタイン夫人をどのように思っていたのか。単なる情事の相手としてみ、交際したのか。三木によると、人間というものはいつも恋をもとめているものという（『山内朝資遺集』非売品、大正11・10、二一九頁）。

シュタイン夫人（藤江未亡人）とは、ふたまわりほどの年齢差があった。知りあったときは、相手は五十代、三木は二十代であった。三木は彼女の性格に惹かれたものらしく、二人の愛は真実のものであったという（山内朝資宛三木書簡――大正9（一九二〇）6・21付。姫路歩兵第十連隊第六中隊第五班より）。

彼女はわざわざ京都から姫路へ出かけ、入営中の三木と会っている。三木は大正九年（一九二〇）四月、徴兵検査をうけ、結果は第二乙種、同

年七月京大を卒業した。八月、教育召集され、姫路の第十連隊で一ヵ月軍隊生活をおくった。

「十二日に私は此処で彼女に逢った。そして私は私が彼女を真実に愛してゐることを見出した。それは私には喜びであり悲しみでもある。君は私が或は道徳的に堕落するかも知れないと云ふ。私は如何に考へていゝのか分らない。走れる所まで走ってみるのだ、外に手がない、と君は云った。

私にもそれより外に途がないやうに思はれる……」

三木の京大入りが絶望的であったころ、東京の法政大学では、

矢崎美盛（一八九五～一九五三、昭和期の哲学者・美術史家、のち東大教授）

河野与一（一八九六～一九八四、昭和期の哲学者・フランス文学者、のち東北大教授）

の両教授が、同時に法政の哲学科をやめようとしていた。三木と谷川が後任として推され、両人の人事は教授会を異議なく通った。

谷川はすぐ就任を承知したが、「三木は素気なく断わってきた」。河野らは、三木が京都に〝残れる〟途がついたと思い、かれのために喜んだ。

ところが、学年も押しつまってから、

「ホウセイナントカタノム」

という電報が舞いこんだ（河野与一「和辻さんの心遣ひ」『三木　清全集』第十巻　月報　所収、昭和42・7）。

結果において、それが三木その人にとってよかったことかどうかわからないが、かれが法政にきたことで、この大学の文学部のみならず、哲学科の令名（評判）があがったことはたしかである。三木本人にとっては、東京行は苦しみ悩んだ苦渋の選択であったかと思われる。

三木は昭和二年（一九二七）春――京都におけるいっさいの教職を辞して上京すると、下宿を本郷菊坂の菊富士ホテルに定めた。かれは大学でおしえるほか、岩波の編集、出版事業に協力するかたわら、論文の執筆、翻訳、講演など大いに活躍した。

同年四月、三木は文学部哲学科の主任教授となり、日本大学[20]と大正大学、さらに文化学院の[21]講師をかねた。

法政につとめるようになってから、ある晩のこと、東京朝日新聞社の講堂で「公開哲学講演会」が開催された。林　達雄も来ていた。三木が壇

上に立つ順番がきたとき、林は講師控室を出て、講堂の二階席へ行こうとし、扉をおして中に入った。聴衆はすくなく、わずか十数名といったところ。

聴衆をちらっと見たときのことである。その中に見覚えのある、小柄な中年の婦人のすがたが、林の視野のなかに入ってきた。その女性は、遠い壇上のほうに吸いつけられるように、前身をのり出して講演者を見入っていた。林ははっと胸をうたれ、そのまゝ急いで廊下に出てしまった。演壇の三木を食い入るような目でじっとみつめていたのは誰あろう、あの〝シュタイン夫人〟であった（林　達夫「三木　清の思ひ出」）。

一　法政における三木　清

三木は法政においてどんな科目を担当し、どのような授業をおこなったのか。かれは法政に着任した昭和二年（一九二七）当時、一週十四時間（七コマ）うけもった。翌昭和三年（一九二八）の文学科、哲学科の担当科目をみると、

哲学概論　　西洋哲学史概説
古代中世哲学　　哲学演習
倫理学演習　　哲学特殊研究

となっている。これらの科目の内容については明らかでない。このほか大学予科（第一部、第二部）の

哲学概論

を受けもっている（『法政大学史資料集　第二十集』平9・3）。

同僚であった谷川徹三によると、講義としては、――

哲学概論　　ヘーゲル研究　　アリストテレスにおける精神の現象学

などを、それぞれ一週に二時間づつ、おこなったという。

また演習としては、――

アリストテレス Aristoteles（前三八四〜三二二、ギリシャの哲学者）の「エティカ」Ηθικά（エーチカ）。

ニコラ・マールブランシュ Nicolas Malebranche（一六三八〜一七一五、フランスの哲学者・修道僧）の Recherche de la vérité（ルシェルシュ・ドゥ・ラ・ヴェリテ）『真理の探求』（一六七四〜七五）。

［課外授業］ヨハン・グスタフ・ベルンハルト・ドロイゼン Johann Gustav Bernhard Droysen（一八〇八〜八四、ドイツの歴史家）の Grundriss（グルントリス）der Historik（デア・ヒストーリク）『歴史綱要』（初版は一八五八年刊）。

＊三木文庫に同書の第二版（一八七五年）がある（全84頁）。K. Miki の著名がある。おそらくベルリン滞在中にもとめたものであろう。注・欧文や注、ルビは引用者が書き入れたもの。

などをテキストに用いたとのべているが、いつのことか時期がはっきりしない。

三年の間、三木の講義や演習のすべてをとり、かつそれに出席した桝田（ますだ）啓三郎（一九〇四〜一九九〇、西洋哲学。のち都立大学教授）は、

デカルト Descartes の演習（用書は不詳）。

アリストテレスの『詩論』Περὶ Ποιητικῆς（ペリ ポイイティキース）　『ニコマコス倫理学』＊Ηθικά Νικομάχεια（エーチカ ニコマケア）。

などを受講している。

＊アリストテレスの倫理学に関するものを、息子のニコマコスが編集したもの。三木文庫にオット・アペルトが編んだ『アリストテレスのニコマコス倫理学』Aristotelis Ethica Nicomachea（一九一二年刊）がある（全279頁）。全文ギリシャ語であり、ところどころに下線が引かれ、余白に――（たて線）がみられるが、三木の書入れのようだ。

桝田はデカルトの演習に出るために、フランス語を自習せねばならなかったし、アリストテレスの演習は、一対一の授業であり、ギリシャ語の原書やラテン語訳を使うため、苦しいものであったが、たのしい思い出になった。

講義のとき、三木はほかの教授たちとすこし異なり、ノートをみて話をすることがあった。このときは他大学の学生も大勢やってくるから、授業中、笑うことはなかったが、皮肉はうまかった。授業はまじめにやった。演習のとき、教室である学生が、〝物〟と〝心〟はどちらが先かと質問した。三木は黒板まで出ていって、

――……けれどもそれを考へる主体といふものが

といい、チョークで「主」と書くと、その左にまた

——しかし、その前に……

と、いいながら「客」の字をかいた。

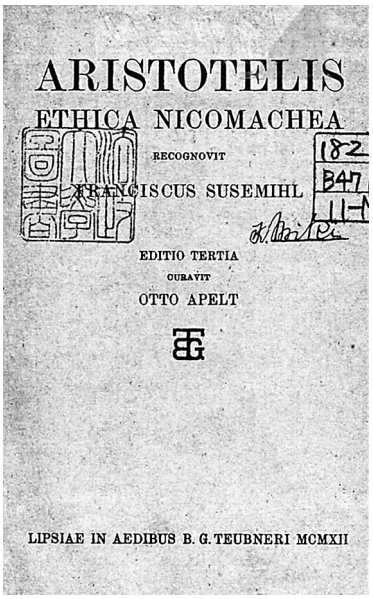
——しかし、その前に、いやそれより前に……

かれはとうとう黒板の端まで歩いていってしまった。みんなゲラ〳〵笑いだしたが、本人はまじめであり、ベルが鳴っても説明をつづけた（桝田敬三郎「三木先生のこと」）。

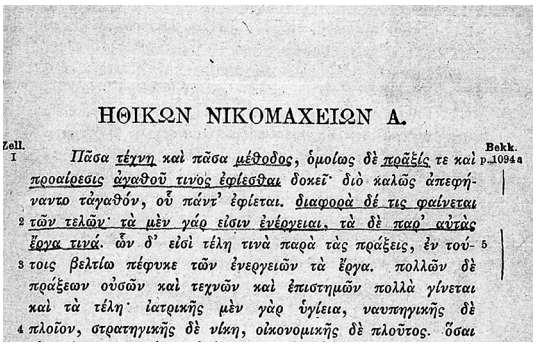
三木のねばり強い説明と強じんな論理、そして熱情がかれの授業から感じられるものであった。

かれが東京行を決心し、法政の教員になる覚悟をきめたとき、京都の哲学のグレン隊仲間に、新しい職場で大いに活躍する意志をつたえ、いろいろな抱負をかたった（林　達夫の谷川徹三宛書簡——昭和2・1・21付）。

大正十三年（一九二四）ごろ、林　達夫は法政の予科の英語講師として、一週十二時間（六コマ）うけもった。が、法政は月に百円（いまの三、



アリストテレスの『ニコマコス倫理学』（1912年）。
［三木文庫］



『ニコマコス倫理学』（1912年）にみられる三木の書入れ。

四十万円？）くれたという。慶応は二十四、五時間もって初給が七十円だったというから、法政のほうが待遇がよかったことになる。三木の給料は百円ほどであったものか。ほかに非常勤として他大学にも出講していたから、じゅうぶん生活できたはずである。

三木は骨身をおしまず授業や講演をやり、訪客をうけ、原稿をかき、またよく勉強し、ロシア語まではじめた。かれはじつに勤勉な学究であった。京大の学生のときからその勉強ぶりはめざましかった（谷川談）。

政府の取しまりがうるさくなったころ、学生が心配すると、

――わたしはマルキシストじゃない。唯物論者ではあるけれど……。

と、いって笑っていたという。

三木はいつも明るかった。明るい顔でゆったり登山でもしている感じをあたえた。

人民前線が弾圧されたとき、

――日本にははじめから〝人民〟などというものはなかった。

といったら、ある学生が、これは単なることばの洒落だと食ってかゝった。

やがて昭和二年がすぎ、昭和三年、四年、五年と時がたっていった。ことに昭和五年（一九三〇）は、一般的な恐慌到来と農村不況によって、日本は不景気のどん底にあった。三木にとってまったく予期せぬわざわいがおこったのもこの年であった。

昭和五年（一九三〇）五月――三木は日本共産党に資金提供した嫌疑で検挙されている。が、この年にかれが担当した科目は、――

哲学概論（歴史哲学）　弁証法の理論（論理学）
自然哲学の問題（古代中世哲学）　倫理学の批判（倫理学概論）
哲学演習（カント純粋理性批判）

などである。

三木は同年七月に起訴されたが、五月に逮捕された時点で法政を解雇されたものであろう。いったん釈放されたのち、十一月中ごろまで豊多摩

刑務所に拘置された。釈放後、週一回法大生のために、「構想力の論理」の草稿を持ってきて、ＹＭＣＡの一室において講義してくれたという（藤原　定「あらしの中の巨木　学芸自由同盟の頃」『法政大学新聞』所収、昭和29・11・5）。

法政の教授をつとめること丸四年にして、三木は五月退職した。というよりは、職を辞さざるをえなかった。昭和十四年（一九三九）四月、ノモンハン事件がおこり、九月には第二次世界大戦がはじまった。同年六月ごろ、学内雑誌『政経研究』の編集員・長尾和郎（法政の政経科の学生、のち読売新聞社出版局につとめる）は、清水幾太郎の取材が不首尾におわったので（約束をほごにされた）、速記者とともに高円寺の三木宅をあたることにした。

折から雨がふっていた。カサをもたぬ二人は、びしょぬれであった。和服すがたの三木が玄関に出てきた。用件をいうと、

――ぼくを追っぱらうような法政の雑誌に何がしゃべれるか……。

と、玄関でどなりつけた。

かれは法大当局から受けた仕打ちに、ふんまんをもちつづけていたようだ。

長尾はとっさに、

――法政がにくいのか、学生がにくいのか？

と、喰ってかゝるようなことばを吐くと、三木はじっと相手の顔を見入ったのち、にやりと笑い、二人を玄関わきの応接間に招いた。

三木は、

――いま原稿をかいているから、ちょっと待ってくれ。

と、いうと二階の書斎へ去った。

しばらくしてかれは階段をおりてくると、巻きタバコのバットを口にくわえながら、「現代学生をかたる」というテーマで二時間あまり取材に応じてくれた。そして速記ができたらもってくること、ひまをみて遊びにくるようにいった（長尾和郎著『戦争屋――あのころの知識人の映像』妙義出版株式会社、昭和30・12）。

三木や戸坂のえらさは、法政を追われたのちも、法大生のために哲学会主催の課外授業をおこなったことである。たとえば、両人は昭和七年（一九三二）から同九年（一九三四）にかけて、つぎのような研究会・講演・講習会などに参加した。

［三木］

昭和7・11・12……弁証法研究会　用書　デボーリンの弁証法（川内訳　鉄塔書院刊）　於　哲学研究室

昭和8・1・？……講演　反ヂューリング論　於　校友会館二階（？）

昭和8・1・？……講座［講習会］ディヴィッド・ヒューム David Hume（一七一一～七六、イギリスの哲学者・歴史学者）の Treatise of Human Nature（「人性論」）　土曜日一～三時

［戸坂］

昭和8・1・？……講座［講習会］　イマヌエル・カント Immanuel Kant（一七二四～一八〇四、ドイツの哲学者）の Prolegomena（「プロレゴメナ」）　金曜日一～三時

昭和9・5・？……講座［講習会］　カール・ハインリヒ・マルクス Karl Heinrich Marx（一八一八～八三、ドイツの革命家・哲学者・経済学者）の「政治経済学批判序説」（邦訳）　金曜日三～五時

注・『法政大学新聞』からひろったもの。

三木のいい方には、尻あがりの関西アクセントがあったようで、講演のときは聴衆をみないで、視線を遠くに投げ、論文口調でやったらしい。かれの講演だが、けっして上手でなかったという（東大教授・勝田守一）。

一　ふたたび獄中へ

昭和二十年（一九四五）一月、米軍はルソン島に上陸した。三月には硫黄島の日本軍は全滅し、四月にはうんかのごとき大軍（五十五万人の

兵）をもって沖縄に上陸し、はげしい攻防戦がくりひろげられた。日本の敗戦はもはや必至であった。

同年三月二十八日の朝、――三木は岩波書店に出かけた。午前十時ごろ、二階の店主の部屋で小林　勇（一九〇三＝八一、昭和期の出版人・エッセイスト、岩波茂雄の次女と結婚した）と話をしていた。小林は話の途中、ちょっとよそ見をしていたら、三木が肩をたたいた。ふり返ると、

――警視庁から来たのだ。

と、三木は落ちついた声でいった。

かたわらに戦闘帽をかぶった二人の男が立っていた。小林は険悪な事態であると思い、三木に

――なにか用事はないか。

と、きいた。すると、

――子供（娘・洋子）のことをたのむ。

と、一言だけいった。

三木は白いカバンを外とうの上から肩にかけ、二人の男にまもられながら、むこうの街にすがたを消した。

小林が三木のすがたを見たのは、これがさいごであった。かれも「横浜事件」（編集者や出版社を弾圧した）の一環として、五月九日特高に検挙され、東神奈川署に拘留された。終戦後の八月二十九日に釈放されたが、からだがひじょうに衰弱していたので信州の妻子のもとにいった。三木の死の電報をうけとったのは、九月二十六日のことだった（小林　勇「人間を書きたい〈三木　清〉戦争に突入した時代の「あたらしい哲学者」の生き方」『文藝春秋』所収、昭和47・12）。

三木はなぜ特高にひっぱられて行ったのか。それには共産党シンパのある男の事件とふかいかかわりがあった。昭和二十年三月十日の東京大空襲があった三日後、三木は岩波書店へやってきた。かれは他の店員もいる部屋から小林をよび出すと廊下にでた。

三木はさえない顔をしていた。小声でこんなことをいった。警視庁を脱出した高倉テル（一八九一～一九八六、大正・昭和期の社会運動家・小説家）がじぶんのところにやってきて、一晩泊まらせ、服と金をあたえて別れた、と。

小林は、

（これは取りかえしのつかぬことになった……）

と思った。

かれは三木にこまごまとした注意をあたえた。

三木は、

――だいじょうぶだと思うがね。

と、弱々しくいった。

高倉に捜査の手がのびていることは、小林の耳にもときどき入ったが、一日おきに会う三木にはいえなかった。三木が高倉と会って、およそ二週間後、ついに特高が三木のもとにやってきた。

高倉は農業問題の研究家でもあり、かねて〝工場や農場のコルホーズ化（旧ソビェトのやり方にならって共同経営をする）運動〟をやっていた。が、これは治安維持法に違反するものであった。かれは警視庁によって検挙され、取調べをうけていたが、昭和二十年三月六日の午後三時半ごろ、監視の巡査のすきをうかがい、取調室から脱走した。しかし、同月二十一日午後十二時ごろ、埼玉県入間郡豊岡町の石川源一郎方で再検挙された。警察の取調べの結果、その逃走を援助したもの、共産主義運動の支援者とみられる分子の存在も明るみになった。そのうちの一人が、

埼玉県南埼玉郡鷹宮（たかのみや）町　著述業　三木　清（39）

であった（昭和20・1～6月分の特高月報の原稿より）。

昭和二十年の三月すえ――夜八時すぎのことである。警視庁の地下留置場に一人の男が連れて来られた。八時といえば、ここでは夜なかにちかい。

晩メシは……午後五時。

就寝は……午後六時。

宮村という囚人（（じつは栗原東洋のことか）が、一ねむりしたころ、看守が、となりの一号室のカギをガチャ〳〵させながら、

――どこから来た？

と、いつものように新入りに聞いた。その者は、かぼそい声で神保町のどこそこ、といった。すると看守は、

——何を！　この野郎！　どこから回って来たっていうんだ。
と、罵声を浴びせるや、その者に、二つ三つ横びんたが飛んだ。
——神保町を歩いているとき、捕まったんです。
宮村は、また治安維持法だなァ…。だれだろう、と思った。まもなく、翌日か翌々日、調べに連れだされたとき、この新入りが三木だということを知った（栗原東洋「獄中の三木　清」『改造』第36巻第2号所収、昭和30・2）。

昭和初期の警視庁

警視庁の留置場は、地下二階の底にあった。そこは日もささない、風もとおらない、文字どおりの地下牢であった。馬てい形をしており、一号から十一号まで部屋がならんでおり、その中央に汽船のブリッジのような見張り台がある。
一号と十一号室だけは、わりあい広く、四坪ほどある。二号から十号までの監房は、二坪たらずの広さである。一号と十一号には、都内の警察でしらべのおわった者が十五、六人おし込められ、翌朝拘置所（未決監）に送られる。三木が入ったのは、この一号室であった。一人だけは、このやゝ大きな部屋に、ながく留置させていたらしい。二号から十号までの小部屋には、だいたい四、五人入れられた。
夜せまい部屋で寝るときは、たいへんである。あおむきに寝れないから、皆んな横むきになり、体を押しあってねた。コンクリートの床のうえに敷いてあるのはござである。寝具といえるものは、くさい、破れた毛布だけである。何よりも悩まされるのは害虫である。
のみ……のみ科のこん虫。からだは平たく、赤茶色。人畜の血をすう。メスはオスより大きい。
しらみ……しらみ科の小形の平たいこん虫。ほにゅう動物に寄生し、血をすう。発疹チフスなどの病原体をうつす。
トコジラミ—俗名・南京虫……とこじらみ科のこん虫。体長は五ミリ。からだは平たく、まるい。赤黄色。人畜の血をすう。
監房でいちばん多かったのはしらみであった。
四月のある日のこと、三木にこんな事件がおこった。

――おーい、何番（囚人は名前でなく、番号で呼ばれる）、何をしている。
と、看守がいった。
――しらみを取っています。
――だれが取っていいといった。ここじゃ飼ってるんだ。
またあるとき、意地のわるい中年の看守がどなった。
――おい、万歳しろ。
――万歳しろといったら、万歳するんだ。反抗する気か！
三木は同房のものから知恵をつけられていたらしく、両手を高くかかげた。
――それでいい。こっちからいうまで揚げておけ。
これは警察でおこなわれる懲罰法の一つであり、房内犯則があったときなど、五分、十分、三十分、一時間とやらされた。が、じっさいは旧陸軍の内務斑における、古参兵によるいじめのようなものであった。
警視庁に送られて、そう日数もたっていない、ある朝のこと、洗顔のとき、ひとり残ってゆうゆうと水を使っていたら、看守に見とがめられ、
――おい、水がそんなにほしいか。
と、いうなり、三木の長髪を引きずり、じゃ口の下に押しつけ、しばらくたれ流した。
獄内でいちばん苦しめられるのは、何といってもしらみであり、看守の眼をぬすんで、一匹、二匹、三匹とつぶしてもラチがあかない。しらみは、かえったばかりの真っ白いやつ、血をたっぷりと吸って尻が赤いやつの二種類がいた。
外からはしらみ、内からは汗とアカとが皮ふにこびりつき、全身がむずがゆい。許可なく手ぬぐいを使うことも、体をふくことも、フロに入ることもできない。
羽仁五郎（一九〇一～八三、昭和期の歴史家。マルクス主義者。日大、自由学園講師）が、警視庁（昭和六年［一九三一］五月完成、六階建）の地下の留置場に入れられたのは、昭和二十年三月のことだった。三月末のある晩のこと、夜間大学にかよっている若い看守が、羽仁のまえに立ちどまると、声をひそめて、

――三木先生がとらえられている。
とつげて、すぐ立ち去った。
羽仁が入れられたのは、十一号室であり、その正面の一号室に三木が入っていた。うすぐらい監房をへだてて三木に声をかけることはできなかったが、立ちあがって三木に手をふり、運動するように身ぶりでしめしたり、手ぬぐいをふって、体をふけと合図したが、いつも微笑をもってこたえるのみであった。
三木や羽仁は沈黙して、コンクリートの床のうえにすわっているのが日課だった。羽仁は三木とすごしたハイデルベルク時代を回想し、かれが好んでもちいたドイツ語のzeitigen（ツアイティゲン）（完成する、仕あげる）という語をおもいおこした。
六月十二日、三木は警視庁から巣鴨の未決監（未決囚）を拘禁しておく施設――「東京拘置所」）に送られた。このときかれはすでにかいせんにかかっていた。宮村という者は三木よりも早く、四月に回されて来たのだが、三木はかいせん房に入っていた。かいせんは、ひぜんだに（体長0・3ミリ）が人間の皮膚に寄生しておこる伝染性の皮ふ病であり、ひどいかゆみをともなった。おもな症状は、赤いブツブツや厚い垢（あか）がふえたような状態（角質増殖）――灰色または黄白色のかさぶたで覆われるような状態になる。この病気は、消毒していない獄衣やフトンを新入りに回すため、そこから伝染するようであった。
巣鴨では、かいせん患者は、一組十人ほど毎日〝硫黄ブロ〟に、「入れ」「沈め」「出ろ」の号令とともに二、三分入れてもらえた。しかし、こんなていどの入浴ではこじれたかいせんは直るはずがなかった。終戦直前の監獄では、囚人をひとなみにあつかわなくなっていた。獄衣を洗たくするでなし、日乾しもしなかった。硫黄ブロもとぎれとぎれになった。
そのうちに巣鴨組は、六月二十日、中野の豊多摩刑務所に移送になった。三木や宮村は、そこのかいせん房に入れられた。
豊多摩の別荘は、巣鴨の別荘よりも建物がふるいために、ひどく荒れていたという。のみがひじょうに多かった。のみといえば、筆者は昭和三十年代――中学の修学旅行で、東京から夜行列車にのり、京都・奈良にいった。京では西本願寺の本堂の大部屋に泊ったが、ここでのみに襲われ、一晩じゅう体をかきぱなしであり、翌朝みなボーとしていた。
豊多摩ののみは、床の板と板とのあいだのすきまを巣としていた。そこに四、五十匹もいた。入所当初は、日中、割ばしを細くしたもので、床のすき間ののみ退治をやるのだが、そのうちにその気力も失せてゆく。水洗便所も水の通りがわるく、よくつまる。くさいことおびただしい。そ

の便器に尻をつけると、かいせんの膿（うみ）がべっとりとつく。が、囚人は痴呆化してくるから、それも気にならなくなる。便器は腰かけと飯台をかねていた。

豊多摩に移送されて一週間か十日ほどしてはじめて、かいせん患者の入湯がはじまった。ここでは二人連れの入浴行であり、木でつくった一人ブロに入れてもらえた。三木と宮村は、ほとんど毎日、薬湯に入った。あるとき三木は、フロにふかく身を沈めながら、人が聞いたらどきっとするようなことをいった。

――担当さん（看守のこと）、戦争のほうはどうなっています？

――戦争！　どうなっているかねェ。新聞じゃ、毎日、勝ってらァな。

――読みたいなァ！

――つまらんよ、ほしけりゃ、見せてやる！

三木にはこんな図太いところがあったという。

時間がきているのに、ゆっくり洗面したり、大胆にも裸になってしらみをとったりした。

時がたつうちに看守とも気安く、話をするまでになった。

獄中の囚人
『労働』（大正元年）より。

――地方の都市がだいぶやられているらしい。

――東京は？

――ちょっと、下火らしいね。

――ソ連は？

――まだわかんないが。ドイツはとっくに手を上げてるんだから、いずれはこっちに向いてくるんじゃないか。

――早く出たいなァ。

――出ても同じですよ。

――しかし！

――イヤ、寝られなくて。
――わたしも……。
――どうしてますか。
――考えないことにしましょう。

三木は宮村にくらべるとまだ元気であった。が、看守が思わず眼をそむけるほど、かんせんが進んでいた。宮村の両手には、白い膿が出ていた。八月ちかくになって、検事の呼び出しをうけたとき、相手は宮村の症状にギョッとし、数日後、しゃばに出ることができた。

そのころの三木も、けっしてよい状態ではなかった。〝ひぜんだに〟は、肉眼ではほとんどみえない。幼虫、成虫は皮ふの表面を歩きまわり、皮ふのなかに掘った穴にかくれたりする。メスは一日に二、三個の卵をうむ。〝かいせん〟の症状が出るのは、――

指のあいだ　両手・両足のまげたりする部分　わきの下
乳房のした　下腹部

など、皮ふのやわらかい所である。

宮村が三木の体をみると、手の甲――首すじ――背中――股(また)から腹のあたり――に、かさぶたが薄く張っていた。

三木はほとんど効果のない薬湯に入ると、しばらくじっとしており、それから皮ふのあちこちに手をまわしてなでた。そしてすきをうかがって看守に話しかけた。

三木はじょうぶな体格をし、体重は六十キロ以上あったという。徹夜して原稿をかいても平気な男であった。ふだんから大食漢であったから、刑務所の貧弱な食事（コーリャン飯）では、体がもたなかった。外部からの差しいれ、内部の食物購入もゆるされなかった。かれの体重は、移動するたびに減っていった。その推移は――六十キロ以上（検挙時）――五十七キロ（巣鴨の東京拘置所）――五十四キロ（中野の豊多摩刑務所）であった。

当時、巣鴨の東京拘置所の収監者は、およそ千百名であり、このうちかいせん患者は、三分の一の三百二十名であった。三木はここでもじゅうぶんな薬品も治療をもあたえられず、かいせんを悪化させていった。

終戦から一週間ほどたった八月二十七日のようすは、――

異相（ふだんと変った人相、すがた）状態
衰弱感　空腹感　体重（五十四キロ）

であったという（「診断簿」による）。

そして終戦から一ヵ月以上もたった九月十七日の診断簿によると、全身にむくみが現われ、尿に蛋白質がみとめられた。かれのかいせんは、腎臓（背骨の両側に一対ある。尿の排泄をつかさどる器官）をおかしていることは明らかだった（羽仁五郎「哲学者の獄死」『特集　文藝春秋　私はそこにいた』所収、昭和31・12）。

八月二十六日――保釈の手続がとられたが、すでにもう手おくれであり、この日三木は汚物にまみれ、ベッドからころがり落ちて死んだ。

三木の遺体を引きとりに行ったのは、東畑精一（一八九九～一九八三、大正・昭和期の農政学者。東大教授。三木の亡き妻・東畑喜美子の兄）と迫間真治郎（一九一一～六五、ソ連経済学者。法大の経済学科を出て、のち日大教授。三木の妹・ちよえと結婚）の両教授と布川角左衛門（一九〇一～九六、法大の哲学科を出て、当時岩波書店の編集員）であった。布川は暗い中野の通りを荷車の車輪のおとを気にしながら、それをひいていった。東畑は、かいせんに患った三木の遺骸が悲惨をきわめていたので、だれにも対面させなかった。娘の洋子も父の死顔に会わなかった（小林　勇「人間を書きたい〈三木　清〉……」）。

一　三木の哲学修業と遺訓

哲学の学徒として、かれはどのような勉強をしたのであろうか。ここでいう学徒とは、かれが一高生と京大の学生であったときのことであり、時代的にいえば大正三年（一九一四、十七歳）――同九年（一九二〇、二十三歳）までをさす。かれは大学を出てから、大正十一年（一九二二）から同十四年（一九二五、二十八歳）十月までの約三年半ドイツ、フランスに留学している。

一高生のときは、〝内省的な彷徨時代〟であり、キリスト教や仏教の本をよくよんだ。聖書や親鸞の『歎異抄』、トルストイの『わがざんげ』『人生論』などが愛読書であった。洋書についていえば、第一次世界大戦ちゅう（大正3～7）は、ドイツ書の入荷がなかったから、おもに英書をよまねばならなかった。

ウィリアム・ジェーズム（一八四二〜一九一〇、アメリカの哲学者・心理学者）……『心理学原理』（一八九〇年）
ジョン・スチュアート・ミル（一八〇三〜七六、イギリスの哲学者・経済学者）……『論理学体系』*（刊行年不詳）
ヴィルヘルム・ヴント（一八三二〜一九二〇、ドイツの心理学者）……『生理学的心理学要綱』**（一八七四年）
ヴィルヘルム・ヴィンデルバント（一八四八〜一九一五、ドイツの哲学者）……「哲学とはなにか」『プレルーディエン』所収。これは一校教授・速水滉の講読会でよんだもの。

＊ 三木文庫に「さらえ書房」（吉祥寺）のシールをはった John Stuart Mill 著 A system of Logic, George Routledge and Sons Ltd, London（刊行年不詳）が架蔵されている。見開きに Jan. 14, 1916. K. Miki と署名がある。大正七年一月十四日に求めたものである。

＊＊ 古書店で原書をみつけたもの。赤エンピツと黒エンピツによる線引きがみられる。三〇頁ほどよんだ形跡がある。

やがて三木は、高等学校の三年生になったとき、西田幾多郎の『善の研究』をひもとくに及んで、大きな感激をおぼえ、哲学を専攻する決心をし、速水教授の紹介状をもって京都の西田をたずねた（大正6・7）。

三木は大正六年（一九一七、二十歳）九月――京大文学部哲学科に入学し、三ヵ年大学生活を送るのであるが、この間じつに多くの和書・洋書をよんでいる。

朝永三十郎著『近世における「我」の自覚史』（大正5・1）
西田幾多郎著『自覚における直観と反省』（大正6・10）
桑木厳翼著『カントと現代の哲学』（大正6・11）
左右田（そうだ）喜一郎著『経済哲学の諸問題』（大正6・12）
大西猪之介（いのすけ）著『囚われたる経済学』（大正9・1）

三木が大学時代によんだものの中でいちばん大きな影響をうけたのは西田幾多郎の著作であり、誌上の論文や著書をみなよんだ。その中に引用されている書物に注目し、それらをできるだけ自分でよむという勉強方法をとった。

洋書ではアウグスティヌス（三五四〜四三〇）、ライプニッツ（一六四六〜一七一六）、カント（一七二四〜一八〇四）、シュライエルマハー（一七六八〜一八三四）、ヘーゲル（一七七〇〜一八三一）、ランケ（一七九五〜一八八六）、ブレンターノ（一八三八〜一九一七）、ヴィンデルバント（一八四八〜一九一五）、ジンメル（一八五八〜一九一八）、ランブレヒト（一八五六〜一九一五）、リッケルト（一八六三〜一九三六）、トレルチュ（一八六五〜一九二三）などを繙読し、必要な書物は西田に注文してもらった。

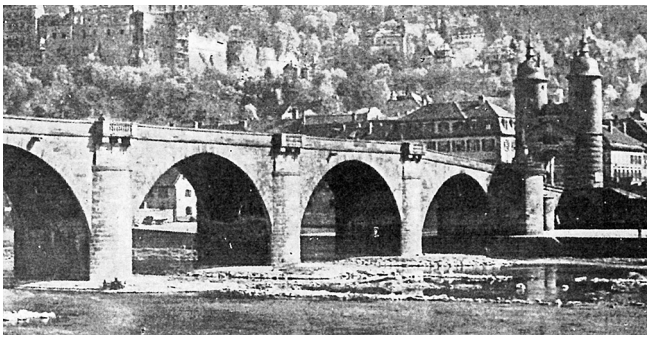
西洋哲学を勉強するにはキリスト教とギリシャ哲学は必須であると教えたのは、波多野精一教授であった。その影響もあって三木は、ギリシャ語の勉強をはじめ、辞引と首引きでプラトンのものをよんだという。学生時代の三木がよんだものは、主にドイツの哲学書であり、フランスのものまで手が回らなかったという。わずかに西田先生からベルグソン（一八五九〜一九四一）の『創造的進化』（一九〇七年）を習ったといっている（「読書遍歴」）。

岩波書店の経済的な後援によって、ヨーロッパに三年半も留学できたことはまことに幸運であったといわねばならない。かれは多くの留学生のように、ぶらぶらと遊びにふけったり、旅行ざんまいの生活とは縁がなかった。三木にとっての留学は、日本での下宿生活——学生生活の延長であった。当時、ドイツにおける暮らしは、ドイツ人にとっては地獄であったけれど、日本人にとっては天国の時代であったという。

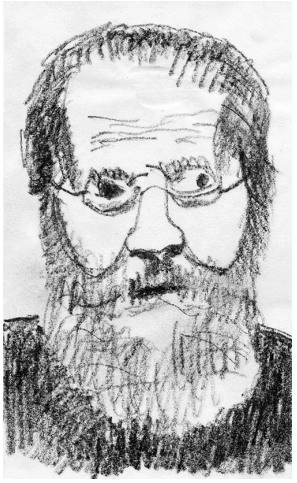
ドイツのインフレは、すざましいものであった。日本からきた貧乏書生の三木なども、超インフレの恩恵にあずかり、いっとき千万長者を経験することができた。たとえば、英貨一ポンドは千マルク以上にもなったし、五ポンドを銀行で換えると、ポケットに入れきれないほどの紙幣をくれるので、Mappe（マッペ）（書類カバン）が必要だった。日本の十円紙幣が、ドイツでは百三十マルクで交換でき、外国為替のおかげで、思う存分本を買うことができた（「読書遍歴」）。

一方、一般市民は、物価の騰貴にくるしめられ、週一回の肉さえ食べられず、たいていの人は黒パンとじゃがいもでかろうじて飢をしのいでいた。ふだん人が相寄ったとき、よく聞かれることばは teur!（トイアー） schrecklich（シュレックリヒ） teur!（トイアー）（「物が高い！おそろしく高い！」）であったし、あるドイツ人は Deutschland（ドイチュラント） ist（イスト） schon（ショーン） kaputt!（カプット）（「ドイツはとっくに崩壊している！」）と嘆いた（小尾範治「ハイデルベルヒより」『思想』第十七号所収、大正12・2）。

ハイデルベルク Heidelberg　大正十一年（一九二二）六月〜同十二年（一九二三）秋　二十五歳。



ネッカー川とアルテ橋（ハイデルベルク）



ハインリヒ・リッケルト

ハイデルベルクは、ドイツでいちばん古い総合大学がある所である。ドイツ南西部――フランクフルトの南八十七キロに位置している。第二次大戦の戦火をまぬがれ、こんにち春から秋にかけて訪れる観光客も多い。ベルリンの雑踏にくらべると、ここは眠ったように静かな町であり、夜がすっかりふけると、人の足音を聞かず、ときどき耳にするのは教会の大時計のひびきである。ネッカー川の河畔に町があり、こんにち人口は十数万である。ハイデルベルクは、日本の学徒にとって憧憬の地であったろう。筆者にとってここは、〝そうゆうの地〟であり、壮年期に二度、〝旅客（ライゼンデ）〟としておとずれたなつかしい想い出がある。四十数年まえの夏――列車が到着するころ、胸に大きな赤十字のマークをつけた中年の看護師の女性が、ホームにたたずみ、病人はいないか、下車する旅客にひとみをこらしていたさまを思いだす。

三木がこの大学町をえらんだのは、この派の学者の書物をわりと多くよんでいたからである。かれがここで聴講生（ホスピタント）として、その講義や演習に出席したのは、つぎのような教師であった。

［演習］ハインリヒ・リッケルト Heinrich Rickert（一八六三～一九三六、ハイデルベルク大教授。西南ドイツ学派の代表者）……三木は自宅（シェッフェル街四番地）でおこなわれるゼミナールに出席した。用書はマクス・ヴェーバー（一八六四～一九二〇、ドイツの政治経済学者・社会学者）の「科学論文集」であった。このゼミには、いつもヴェーバー夫人が出席していた。大正十二年（一九九二三）夏のゼミで「真理と確実性」を報告した。

［演習］オイゲン・ヘリゲル Eugen Herrigel（一八八四～一九五五、当時ハイデルベルク大講師。のち東北帝大教授。西南ドイツ学派の思想を日本に伝えた）……用書は不明。三木はヘリゲルからエミル・ラスク（一八七五～一九一五、ドイツの哲学者）の哲学を学んだ。三木はヘリゲルのゼミでベルンハルト・ボルツァーノ（一七八一～一八四八、チェコの数学者・哲学者・神学者）について報告し、のちそれに筆をくわえ、『思想』に発表した。大正十二年（一九二三）夏のゼミで「論

理学における客観主義」を報告した。

［講義］カール・ヤスパース Karl Jaspers（一八八三～一九六九、ハイデルベルク大教授。実存哲学者）……当時、同人はニーチェやキエルケゴールについて講義していたが、三木は二、三回出席してやめた。

［講義］エルンスト・ホフマン Ernst Hoffmann（一八八〇～一九五二、プラトン研究家）……三木は同人の論文「アリストテレスの教説に於ける神と存在」を日本語に訳し、『思想』（大正13）にのせた。ホフマンは後年、ハイデルベルグ・ルプレヒト・カー大教授になった。

当時、ドイツの学者は、みな超インフレに苦しみ、生活が窮迫していたから、若い博士連中はたのめばみな喜んで日本人の個人教授をしてくれた。三木はかれらを家庭教師にして勉強した。かれがいっしょに本をよんでもらったフィロゾーフ（哲学者）に、つぎのような人々がいる。

個人指導をうけたドイツ人。

オイゲン・ヘリゲル……三木は他の日本人留学生とともにヘルダーリンの『ヒュペリオン』をよんでもらった。

ロベルト・シンチンゲル（一八九八～一九八八、ドイツの哲学者。ハンブルク大卒）……ホフマン教授の紹介でプラトンをよんでもらった。大正十二年（一九二三）来日し、旧制大阪高校、東北、京都、東京帝大、学習院で教鞭をとった。

ヘルマン・グロックネル（一八九六～一九七九、リッケルト教授の下宿人）……三木は羽仁五郎といっしょにヘーゲルの『精神現象学』をよんでもらった。グロックネルは、後年、ブラウンシュヴァイク工科大教授になった。

カルル・マンハイム（一八九三～一九四七、ドイツの社会学者）……三木は羽仁五郎といっしょに、マクス・シェーラー（一八七四～一九二八、ドイツの哲学者、社会学者）の知識社会学の話を聞いた。

大正十二年（一九二三）五月二十七日――「日本の哲学に対するリッケルトの意義」が、『フランクフルター・ツアイトゥング』紙に掲載された

（リッケルトの紹介による）。

マールブルク Marburg　大正十二年（一九二三）秋〜同十三年（一九二四）八月　二十七歳。

マールブルクはドイツ中部、フランクフルト＝アム＝マインの北九十六キロに位置するいなかの小さい、静かな大学町である（こんにち人口約八万）である。町は山のすそから頂にむかって作られ、山すそにラーン川が流れ、川のむこうに丘や白樺の森がみられた。三木はひまがあると、好んで散策に出かけた（「消息一通」一九二四・一・一付、『思想』第二十九巻所収、大正13・3）。三木はハイデルベルクで知り合った多くの日本人と別れ、こんどは一人で暮らさねばならぬと覚悟をきめて行ったら、ここにも日本人留学生が多数いた。

三木がこのいなか町で師事し、その講義や演習に出席し、また読書や語学（フランス語）を指導してくれたのは、つぎのような教師らであった。

［演習］マルティーン・ハイデッガー Martin Heidegger（一八八九〜一九七六、ドイツの実存主義哲学者。当時マールブルク大助教授）……三木はマールブルクに着くと、ハイデッガーの門をたたいた。アリストテレスの研究を勧められ、ハンス・ゲオルク・ガダマ（一九〇〇〜二〇〇二、ドイツの哲学者。のちハイデルベルク大教授）というドクトルを紹介され、その家でアリストテレスの『形而上学』と『ニコマコス倫理学』の抄録（？）をよんでもらった。後年、三木は法政の演習のとき、『ニコマコス倫理学』を教材に使っている。ハイデッガーのゼミでは、アリストテレスの『自然学』、エトムント・フッサール（一八五九〜一九三八、当時フライブルク大教授）の『論理学研究』をテキストに使った。

［講義］ハイデガーは講義において、よくデカルトの『省察録』をよく用いたという。三木はそのためこの本を精読できたといっている。

［演習］ニコライ・ハルトマンNicolai Hartmann（一八八二〜一九五〇、当時マールブルク大教授）……三木はハルトマンのゼミに出席した。用書はカントの『純粋理性批判』とヘーゲルの『論理学』であった。

個人指導をうけたドイツ人。

カール・レーヴィット Karl Löwith（一八九七〜一九七三、ドイツの哲学者）……ハイデガーの助手であった同人の家に通って、フッサールの『論理

学研究』をよんでもらったり、のちときどき文通によって読書の指導をうけた。ドイツ精神史のなかに案内され、シュレーゲル、フンボルト、ディルタイ、ニーチェ、キェルケゴールのものを愛読するようになった。

レーヴィットは、ナチのユダヤ人迫害により、日本をへてアメリカに亡命、戦後ハイデルベルク大教授となる。日本では東北帝大の講師をつとめた。

フランス語（教師名不詳）……三木はマールブルクからパリにいくことに決めていたから、フランス語会話を教える婦人のもとに一ヵ月ほど通った。

パリ　大正十三年（一九二四）八月～同十四年（一九二五）九月　二十七、八歳。

大正十三年一月、ハイデルベルクにいる羽仁五郎をたずね、春三月、ウィーンに旅行した。このときアンドレ・ジードの小説を数冊もとめた。八月、ハイデルベルクを訪ずれ、知人に別れのあいさつをした。ケルンをへて初秋にパリにむかい、エトワルちかくの下宿に入った（京大哲学科を出た小林市太郎の世話による）。

パリの街では、いつも多くの日本人をみたという。著名人や偶然出会った人も多かったが、人づきあいをさけた。長く滞在する気や大学に籍をおくつもりはなく、パリ見物やルーブル博物館通いをしたり、ソルボンヌの公開講義をひやかすていどであった。しかし、小学校の女の先生をやとい、フランス語会話の勉強をつづけた。下宿ではテーヌ（一八二八～九三、フランスの批評家・哲学者・文学史家）やルナン（一八二三～九二、フランスの批評家・歴史家・言語学者）のものをよく読んだ。が、冬ごろ、ふとパスカル（一六二三～六二、フランスの哲学者・数学者・物理学者）の『パンセ』を手にしたことがきっかけとなり、同人に興味をおぼえたので、なにか書いてみようと思った。

そのためフォルテュナ・ストロウスキー（一八六六～一九五二、ポーランド系フランス哲学者、ソルボンヌ教授）の『パスカル』、ピエール・ブトルー（一八八二～一九二三、フランスの数学者）の『パスカル』等の文献をあつめ、よみはじめた。パスカル研究の第一論文は「パスカルと生の存在論的解釈」であり、つづいてパリ滞在中に他三篇をかき、『思想』に掲載してもらった。

三木が帰国したのは、大正十四年十月である。が、翌十五年（一九二六、二十九歳）六月、パスカルに関する論文をまとめ『パスカルに於ける人間の研究』と題して、岩波書店から出版した。が、この本を小売店に出したところ、返品が多くて版元もこまったらしい。三木という名は、まだ無名にひとしく、ましてやパスカルの名を知るものは専門家をのぞき少なかったからである。

三木の遺訓。

三木は哲学の仲間に、せん越なことをいっていた。哲学を専攻する者は、何でも原書でよむけいこをしておかねばならぬ、と（「読書遍歴」）。そういうかれはどんな外国語を識っていたのか。三木にとって外国語は、専門とする哲学の本をよむための手段もしくは用語にすぎず、それを思想の〝符号〟もしくは〝伝達器〟ほどにしか思っていなかったようだ（「消息一通」）。

英語は中学や高校でまなび、ドイツ語は一高ではじめて習い、三ヵ年やらされた。フランス語は一高生のとき本郷の寄宿寮から九段の暁星学園の講習（朝七時から八時まで）に通ったことがあったが、長くはつづかなかった。一高の授業は午前八時からはじまり、かなりむりをせねばならなかった。その後、留学先のドイツやフランスで個人教授をうけているが、日常会話が中心であった。フランス文を読む方は、字引をたよりの独学であった。

古典語のギリシャ語やラテン語も独学であったようだ。

西洋哲学――ことにドイツ哲学を勉強するには、伝統的にむずかしい本をよむ必要があった。それにいきなり食らいついても、頭からわかるはずのものでなく、何年もの修業が必要であるといっている（「哲学をどう学んでゆくか」）。三木の卓越した頭脳をもってしても、ドイツ書をよみ、理解することは容易ではなかった。

一高生のとき、読んでもよくわからなかったものは――

(一) ヴィルヘルム・ヴィンデルバントの『哲学概論』『プレルーディエン（序曲）』

(二) ヴィルヘルム・ディルタイの『哲学の本質』

(三) イマヌエル・カントの『純粋理性批判』

などであった。

㈠のヴィンデルバントのものは、「正直にいふと、よく理解できなかった」といい、㈡のディルタイのものは「やさしいとはいへ」ず、㈢のカントは、まだ翻訳が出ていなかったので、「ドイツ語の辞書を引きながら、一生懸命に勉強したが、わからないことが多くて困難したのを覚えてゐる」と語っている（「哲学をどう学んでゆくか」）。

高校生のときといえば、はたち前後のころであるから、語学力も知識量もまだじゅうぶんとはいえなかったであろう。これらの原書は、けっきょく、全巻を通読することなく、途中でよむのをやめたものであろう。

三木の読書法というのは、すこしよんでみておもしろくないと、遠慮なく放りだすものであった。本はかならずしも初めからよまず、ときに中ほどから、あるいはおわりからよんだ。書き込みについていえば、いっさいの書き入れをしないのを原則とした。必要な個所にエンピツでちょっとしるしをつけておく（たとえば、本文に下線を引いたり、余白にタテ線――を入れる）。

本をよごさなかったのは、じぶんの本が他日だれかに使われることを考え、なるべくきれいに保存しておきたかったからである（「私の読書法」）。

三木は原典主義であった。解説書（手引書）や参考書をよむことの必要性をみとめてはいたが、本質的には、原典（もとの書物）を中心とし、これをたよりとせねばならぬと考えた。原典はもっとも信頼に足る書物であった。

しかし、原書をよむには語学の力がなければならぬ。本のカバーからカバーまでよみ通すことは、力と根気がないとできない。三木は語学を西洋哲学をやる単なる手段とは考えず、それを一つの重要な教養とみていた。

ところで中学や高校で漢文直訳体（原文そのまゝの和訳）のようにまなんだ英語やドイツ語――とりわけ三木のドイツ語はどのレベルのものであったのか。ハイデルベルクでリケットやヘリゲルの演習に出たとき、一般の文部省留学生なら、語学力がじゅうぶんでないので、傍聴者（単なる聴講生）であってもよかったのに、他の学生とおなじようにリポートを計二回もやったのである。

リケットのゼミには、ふつうの学生のほか、

カール・マンハイム（一八九三～一九四七、ハンガリー生れの社会学者。のちナチスに追放され、ロンドン大に移る）

オイゲン・ヘリゲル（一八八四～一九五五、当時ハイデルベルク大講師）

ヘルマン・グロックナー

ヘルマン・グロックナー（一八九六～一九七六、当時リケット家の下宿人。ヘーゲル研究の大家。のちハイデルベルク、ギーゼン大教授、ブラウンシュヴァイク工科大学教授となる）

など、後年有名になる学者も日本人といっしょに机をならべ勉強していた。

ドイツ語の運用力もじゅうぶんでない三木は、けっしてうまいとはいえぬ発音、変なドイツ語でレポートをよみあげた。

「ふつうのドイツ人は、三木さんのドイツ語を聞くと、みんな三木さんを馬鹿にしてしまうほどでありました」（羽仁五郎「わが兄・わが師三木清」）という。しかし、かれはおくせず、堂々と発表をしたらしい。列席の学生や新進の学者らは、かれのレポートをしずかに聞いていたという。

三木は日本における西洋哲学の研究水準や日本人の研究のあり方をどのようにみていたのか。かれは日本の学界の水準は、けっして高いものでなく、西洋の学界のそれよりも低いことを認識していたようである。日本の学者がヨーロッパの第一流の哲学者に追随して、その学説を祖述していること。かの国の研究者からみれば、日本人の研究は独創性にとぼしく、劣っていることを知っていたはずである。しかし、日本人の研究の全体的な質が他とくらべて悪いものだとしても、そこに何か本質的な極小の美点（よいところ）があれば、欠点を相殺し、再評価されることを願ったかも知れない。

一方、三木が大学生のとき、その教えをうけた西田幾太郎も、漢学的教授法によって英語やドイツ語をまなんだ一人であるが、そのドイツ語の能力について疑問を投げかける者はすくなくない。その理由として――

一　外国文献からの引用が、しばしば要約めいたものであり、どの本の何頁というかたちになっていない。つまり典拠があいまいである（小林敏明著『西田幾太郎の憂鬱』、岩波書店、一二九頁）。

一　ドイツ観念論についての批判が不正確であり、批判該当箇所すらテキストに見い出されないことがしばしばある（四日谷敬子「場所の論理とドイツ観念論」）。

一（ドイツ語の）発音の方もお世辞にも上手だとは言えなかった（山口高校で西田からドイツ語を習った河上　肇［一八七九～一九四六、明治から昭和期の経済学者・社会思想家。のち京大教授］の証言。

田中美知太郎（一九〇二～八五、昭和期のギリシャ哲学者。のち京大教授）が、京大に選科生として入学したのは大正十二年（一九二三）であり、同十五年（一九二六）まで三ヵ年在籍した。この間かれは西田の講義や演習に出席した。田中は西田の哲学ばかりか、語学力にもうたがいを抱いていたようなふしがある。

西田の服装は、和服にクツばきというスタイル。着物はそまつなもの。着方はだらしない感じ。そんなかっこうでかれは教壇に立った。

［講義］

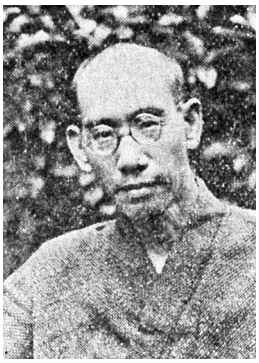
哲学概論……ノートも何もみないで、行きあたりばったりのもの。しりきれとんぼのものが多く、完結せず、あとがつづかない。

アリストテレスの『形而上学』……ヴェルナー・イェーガー（一八八八～一九六一、ドイツの古典文献学者。キール、ベルリン大教授をへて渡米。シカゴ、ハーヴァード大教授）の『アリストテレス形而上学の成立史』（一九一二年）の紹介のようなもの。

このときはいつもとちがい熱が入り、早口で話したらしい（田中美知太郎談）。

［演習］

ヘーゲルの『精神現象学』、フッサールの『イデーエン』……田中美知太郎が受講したのは、この二つであった。フッサールの『イデーエン』では、



西田幾太郎

西田のサイン

西田は黒板に円をいくつも描いて説明するのだが、話に窮すると、「きょうはどうもいけない」というようなことをいって、さっさと演習をやめ、教室を出ていった。

西田の演習は、人数の多い教室でおこなわれたようで、あまりおもしろいものではなかった。学生は順番に訳読をあてられるのだが、中味がまったくわかっておらず、ただ機械的にむずかしい訳語を当てていった。

たとえば、……heit、……keit といった語尾の名詞が出てくると、いつも判を押したように「……性」と訳し、前置詞はすべて「における」といっていいようなものであった。文章のあやも論理の筋もない訳であった。学生がしどろもどろの訳をしたときなど、西田は遠慮なしに大きなあくびをしたという。

学生が訳しおえたとき、先生の説明があるのだが、それはテキストにそくしたものでなく、教師の思いつきであった。原文がむずかしいものなら、教師はそれについて解答（つぼにはまった訳）をしめさねばならぬはずだが、あえてそれをやらなかったということは、原文を正確によむ（正確な逐語訳）ができなかったものか。

これと似たようなやり方をしたのは、東大で美学をおしえた大塚保治（やすじ）（一八六八～一九三一、明治・大正期の美学者）である。この先生は、演習で学生にドイツ文を訳させたあと、受講生に「この訳でよいか」と聞くと、じぶんで何の訳も注釈もくわえず、先に進んだらしい。

田中は西田のだらけた演習のやり方にすっかり退屈しただけでなく、腹がたった（第七章「京都での学生生活」『田中美知太郎全集　第十三巻』所収、筑摩書房、昭和62・6）。

谷川徹三が京大の哲学科にはいったのは大正七年（一九一八）のことであるが、大学に入ってみて多くの講義に失望し、だんだん教室から遠ざかるようになった。西田の特殊講義（ベルグソンの『創造的進化』を英訳でよむもの）すら、「だんだんなまけるようになった」と、のべている。いわゆる原文をよんで訳すだけの授業にがっかりしたということか（谷川徹三『自伝抄』中央公論、昭和64・4、三九頁）。

戦後の一時期、西田哲学への関心が高まり、その本の売れゆきがよく、岩波書店では行列ができるほどであった。西田は東西文明をあわせたひじょうに独創的な哲学者と評せられたが、その門に学んだ田中美知太郎は、冷厳な目でそれをみつめ論難した。田中によると、日本のこんにちの文明はみな借物であるという。日本人のインテリは独創というものにコンプレックスをもっているため、たまたまその偶像を西田にみいだし、独

創性を強調した。

田中は明言をさけ、比ゆ的に、日本の哲学者を批評して、つぎのようなことをいっている。かれらはヨーロッパ思想の目利き、利き酒人（酒のよしあしを見分ける人）、名曲鑑賞家のような者であり、いちばん多いのは田舎の鑑賞家だ、と。そうゆう人間は、変に通ぶっているが、あやしいと思われる（半可通の意）。

西田は明治時代からの教養があり、広い視角でヨーロッパ文明や哲学の伝統をうけた。が、ヨーロッパの哲学をほんとうに自分のなかに入れてやっているかというと（吸収してじぶんのものとする意）、これはちょっとあやしい（疑がわしい）、と。[22]

西田の偉さは、作曲家として、われわれの鑑賞にたえるものをつくったことである（独自の哲学をつくった意か）［田中談］

一　戸坂　潤のさいご

戦中、戦後の法政の歴史をかたるとき、かならず登場するのは、三木と戸坂である。この二人は旧法のもとで、共に獄死しているからであろう。

戸坂が三木のあとをうけて法政にくる前年――昭和五年（一九三〇）四月、当時逃走ちゅうであった共産党員・田中清玄（一九〇六～九三、実業家。東大在学中に共産党員となるが、獄中で転向した。戦後、政・財界の裏面で活躍した）を自宅に泊めたため検挙された。［第一回目の拘束］

翌昭和六年（一九三一）、谷川徹三（当時法政の法文学部哲学科の教授）の推せんによって、法政の教員になるため、京都におけるすべての教職を辞し、上京した。が、数年後におきる法政騒動のとき退職に追い込まれた（昭和9）。

戸坂が法政において教鞭をとったのは、わずか数年であるが、つぎのような科目を担当した。

戸坂　潤

昭和六年（一九三一）……論理学　論理学概論　西洋哲学概説　哲学演習
昭和七年（一九三二）……論理学（認識論に代用）　西洋哲学史（古代中世）　哲学演習（エトムント・フッサール Edmund Husserl［一八五九～一九三八、ドイツの哲学者。現象学の創始者］の Ideen（「イデーエン」）。
昭和八年（一九三三）……倫理学概論（倫理学考察）

昭和七年（一九三二）十月、仲間と唯物論研究会（唯物論の理論・方法などを研究し、その普及活動をおこなう学術団体）の創設に参加したり、上智大の『カトリック大辞典』の編集にたずさわる一方で、批評活動に従事し、もっぱら著述で生計をたてた。機関誌『唯物論研究』（のち『学芸』に改める）は、昭和十三年（一九三八）終刊となった。同年、いわゆる〝唯研事件〟で検挙され［第二回目の検束］、昭和十五年（一九四〇）五月まで、杉並警察署に留置された。

戸坂はうすぐらい真四角な建物の留置場で一年半ちかく過さねばならなかった。ここの〝ブタ箱〟は、床が板張りであり、その上にゴザが一枚あるだけである。警視庁や刑務所の監房とおなじく、ここにはのみ、しらみ、南京虫などがいた。

留置場は、社会のはき溜であるから、いろいろな人間がやってくる。ドロボー――不良――酔ぱらい――浮浪者――売春婦――スリ――ヤクザ――的屋（てきや）など。食事は、一日に三度、すべて仕出屋の弁当である。栄養やカロリーや量の点でも刑務所以下である。下痢もつらいが、十日も半月も便通がないのもつらい。トイレは一定の時以外には行けないし、看守の目のまえで用をたさねばならない。

留置人は、刑務所とちがって、大部分は二、三日で出てゆくが、思想犯は長期滞在者なのである。戸坂は杉並署において、雑役（署外に出歩いて看守の手伝いをする役）とか看守日記（だれそれは何月何日、どこそこを徘徊中、不しんのかどで検束された）を書き込むしごとをやらされた。ほかの使役としては、お茶くばり――ガリ版刷りの手伝い――そうじ――文書整理などもあった。が、戸坂はお茶くばりやそうじは、上手なほうではなかった。

戸坂は美食家のうえ、三木とおなじように大食家であった。一年半のあいだ、ほぼ毎日、夫人か女中が昼食の差し入れにやってきた。かれの注文はなかなかこっていた（佐伯陽介「留置場にて」『回想の戸坂　潤』所収、勁草書房、昭和51、11）。

中村屋のロシアケーキ　コロンバンのシュークリーム　銀座の某店のアズキアイス　スイカ（仕出し屋の井戸で前日から冷やしたもの）　雑煮［正月］（魔法びんに〝汁〟を入れ、モチを焼かせたもの）

また仕出し屋から取りよせたものは、

ハムエッグ　焼ブタ　酢ブタ

などであった。当時は太平洋戦争がはじまる前のことであったから、食糧事情がまだ窮迫していなかった。

昭和十四年（一九三九）の秋から冬にかけての取調べ（警視庁の特高課から、係員が出張しておこなう）も一応おわり、あとは〝送り〟（拘置所――刑務所）をまつだけであった。が、なかなか検事局から通知がこなかった。どうも懲罰的に引きのばしているらしかった。

昭和十五年（一九四〇、四〇歳）五月――起訴され（検事が裁判所へ公訴した）、東京拘置所に移った。十二月八日――保釈出所し、二年十日ぶりで帰宅した。同十六年（一九四一）より、ふたたび上智大の『カトリック大辞典』の編さんのしごとに従事し、週三、四回通った。

昭和十七年（一九四二）の夏ごろより裁判がはじまり、十二月第二審で懲役三年の判決が出ると、ただちに上告した（不服を申し立てた）。同十九年（一九四四）三月、大審院において上告棄却の申しわたしがあって、開廷五分で閉廷。九月、東京拘置所へ下獄。

昭和二十年（一九四五、四十五歳）――五月一日、空襲のため長野刑務所に移された。

戸坂が入れられたのは北むきの七舎の八号の独居であった。その後、七舎七号――六舎の二十七号（〝かいせん〟のため隔離）――七舎の十四号（亡くなった監房）と移動した。戸坂は長野にきたとき、すでに栄養失調からくる悪質の下痢になやまされていた。昼は空腹、夜は害虫（のみ、しらみ、南京虫）に攻められた。

栄養失調と劣悪な食事（コーリャン飯）に起因する下痢は、医務課では、病気のうちに入れず、診察を申し出、薬をほしいといっても受けつけてもらえなかった。

――食うのをやめれば、下痢はとまる。

という医者のことばを信じ、空腹をかかえながら、断食し、餓死へと追いこまれ、死んでいった若者は何人もいたという。

栄養失調の症状は、下痢のほか――顔や足のむくみ――視力の減退――感覚異状――耳鳴り――脈拍の低下――などをもたらし、もはや正常な体でないことは明らかだ。たまたま運動に出たとき、看守の目をぬすんで、運動場の木の芽、雑草の若葉をとり、それをミソ汁の中に入れて食べ

たりした。また空地利用の菜園から、野菜を盗み食いする者が、あとを絶たなかった。このばあい、懲罰として、三分の一の減食であった。

長野に来て二カ月ほど経った七月上旬――戸坂のからだに〝かいせん〟が広まりはじめたが、手当てらしい手当てをうけられなかった。医務課では、

――いまどき、かいせんでない者は、一人前の囚人ではない。

と、いっていた。

八月のはじめ、チブス患者が続出したために、第一回の予防接種がおこなわれた。このとき注射のために出した戸坂の左腕は、練馬ダイコンのようにふくらみ、色はどす黒くなっており、見るからに気味のわるいものであった。

戸坂は、心細げに、

――先生、だいじょうぶでしょうか。

と、たずねた。

――だいじょうぶだ。

と相手は答えた。しかし、だれの眼にも、戸坂に危険が迫っていることは一目瞭然であった。

死の前日――八月八日――病舎に収容されるとき、もう歩くことができず、見るにみかねて、同囚のKという者が手をかし、背負って行ったが、Kも病人であった。同人も体が弱っており、途中で戸坂の体をおとしてしまった。

病棟に入ったとき、戸坂の心臓はよわり、脈拍も異様に断続していた。それにもかかわらず、医者は

――見るまでもない。

といって、診察もせず帰宅した（大森嶺夫「この眼で見た戸坂潤氏の獄死」『真相』創刊号所収、人民社、昭和21・3）。

翌朝、Kは病棟をたずね、窓から声をかけてみたが返事はなかった。戸坂は死体となっていた。医者はまだ出勤していなかったし、看護人もいなかった。戸坂は栄養失調とかいせんによる急性の腎臓炎によって、酷熱の病棟でひとりさみしく逝ったのである。享年四十六であった。長崎に原爆が投下される八月九日のことであった。

敗戦を機に、天皇制絶対主義下のわが国の数々の暴虐やでたらめぶりを明らかにしたのは、雑誌『真相』であった。日本国民は、耳をふさがれ、

目かくしされ、聖戦と称するものにいやおうなしに協力させられ、あげくの果てに、家も家産もうしない、国土は焦土と化して終戦をむかえた。が、復興のみちすじにおける国民生活は、平坦なものではなく、困苦にみちたものであった。

あとがき

あと数年もすれば、法政大学は創立一四〇年をむかえる。本学の母体――「東京法学社」がうぶ声をあげたのは、明治十三年（一八八〇）四月のことであるが、その後この古い沿革をもつ学舎とかかわりをもった学生、教師、職員の総数は、ゆうに四十数万人を超えている。

本稿は、明治・大正・昭和期の天皇制絶対主義下において、本学にまなんだ、またそこで教鞭をとった人びと――とくに体制に抗し、治安維持法によって拘禁され、学園から追放された学生や教師たちについて描いたものである。

法政大学の建学の精神は、フランス法学の自由民権思想とされ、その学風は、戦前から自由と進歩であった。これらのことばは、いまも法政の座右銘となっている。この大学の歴史をしらべ、関係者の想い出を総合してみると、全体的校風として、〝自由とおおらかさ〟や生気にあふれた明るさなどが特徴とみられる。

こんにち法政は、国内や外国からどのように見られているのかよくわからぬが、穏健着実の独特の学風をもった日本の大手私大のひとつということであろう。この学校がむかしから受けついできた学統――教える自由とまなぶ自由――は、いまも生きているようだ。何よりも各分野の一流の教授をようしていることがこの学校の誇りであり、世間一般からは、よい先生がいる進歩的な大学とみられている。

しかし、戦前に軍国主義の波が大学にも押しよせるようになると、学生や教員の社会運動も有形無形の制約をうけるようになり、大学の自治――大学の自由などは、すでにどこかに吹き飛んでしまっていた。大学も当初ファシズムの波をもろにかぶり、保守的になり、学内にいるお目付役の〝学監〟は、学務や学生に目光らせるようになっていた。

昭和初期、『東京朝日新聞』が報じる法政大学の教育方針は、人格主義の薫陶だといい、外来思想にうごかされ、軽はずみな行動に出たり、偏見に失したりすることがないよう、かたくいましめているという（昭和3・3・6付）。

また法政は、世間によくみられる売名的運動や営利的施設を排斥し、隠忍自重しており、私立大学ちゅうもっとも信頼すべき学校だという。

思想関係からみた法政の訓育方法は、予科においては修身の授業ちゅう、社会思想に留意し、その他は特記するものはないという。本学の創立

以来の精神――質実穏健の風をもってつねに学生の指導訓育に努めている（昭和6・3、特高の報告による）。

法政における教育の自由についていえば、昭和十年前後（一九三四～三六）、東大の経済学部において外書講読のテキストに、マルクスの著作を用いることはできなかったが、本学ではレーニンの『帝国主義論』やマルクスの『資本論』などが教材として用いられた。[23] 当時、学生はマルクスの「マ」の字をも口にすることができなかった。[24]

法政は学園騒動（昭和8～9年、予科教授の紛争問題）以前は、ひじょうに自由なところであったといい、[25] 戸坂　潤などは、研究室を借りて読書会をひらいたが、哲学のテキストに社会関係のものを使った。帝大の学生もその会合に来ていたが、マル系のものを東大で使わないから来るんだ、といっていたという。

昭和十年代――私学は官学に率先して自由を売り渡そうとしていた。当時の総長・小山松吉（まつきち）（一八六九～一九四八、明治から昭和期にかけての司法官僚、斎藤内閣の法相をへて、昭和九年［一九三四］法大総長）は、事なかれ主義者であった。が、法大経済学部の労農派教授の検挙事件（昭和13・2）以来、ガタガタになった同学部の崩壊をくいとめねばならなかった。学内においては、大学新聞（『法政大学新聞』）にたいする学生課の検閲は、従来お座なりのものが、しだいに干渉的になってきた。

また学生たちが主催した学術講演会には警察特高の目が光っており、かりに論壇の著名人を講演にたのもうとしても、学校当局は許可しなかった（平岩八郎「もり上った軍国の波――大学新聞編集を通して」『法政大学新聞』所収、昭和28・11・1付）。

そればかりかファシズムの粗暴な政策を推進するために、学園に配属将校が侵入してきたし、学生主事を統轄するために〝学生総監〟なるものが新設され、それに中野直三少将が就任した（『法政大学新聞』昭和15・4・20付）。

法政には他の私学にあまり例がないほど、教授会の自治と権威が確立していたが、やがて経営や学務行政は政治的野心をもった理事に専有されるに至った。教員は単なる使用人。学生は単なる顧客と化したのである。それでも学園には文化的香気がただよい、たとえ教師の待遇がわるくても、そのふん囲気がよくて、教授と学生が夜おそくまで研究討論をするのが法政の特色でもあった。

しかし、教師があまり熱心に学生指導をすれば、かれらと結託してなにか事をおこそうとしているのではないかと邪推され、学校当局からにらまれた。[26]

大学における各学部の自治とか自由といっても、その定義はあいまいである。大学（官立、私学）は部分社会（団体）であり、むかしもいまも

国家の管制下にある。国家という大きなわく組みのなかで、法人団体が学生をあつめ、教師が一定のやり方（むかしもいまもじっさいは確固たる方式によらず、好きかってにやっている）によって教育をさずける施設が大学である。法律や学則にてらして、各学部において学務行政を自主的におこなうのが自治である。

自由とはなにか。一般的いみで、自由といえば、思うまゝに行動できる状態をいう。が、旧体制下では、政治的自由も精神的自由もなかった。日本国民はみな圧制的な風土のなかで、つよい圧迫感をもって、ひっそりと生きていた。

大学における自由といえば――教師の研究の自由――講義の自由――研究発表の自由などを指し、学生側からいえば聴講の自由をいう。が、時局の推移とともに、それらの自由がおびやかされるようになった。大学教員に自治や自由の観念がひじょうに稀薄だったのは、へたにそれらを主張すれば、学校当局からにらまれ、教授の身分保障――生活権をうばわれ、学校から放逐される懸念があった。

数十年まえ、筆者は市ヶ谷校舎の教授室で本学の専任や非常勤講師と会うと、授業がはじまるまで、よもやまの話をした。が、郊外の劣悪な私学につとめるある年配の教師が、法政にくると大学らしい感じがするといってよろこんでいた。勤め先は、専制的な会社みたいな、かなりひどい学校らしかった。そのような学校に比べると、本学などは、学的業績においてはもちろん、新聞雑誌からテレビにいたるまでマスコミの世界で活躍している顔が多数おり、よほどうらやましい学校に写ったようである。

戦前の法政の学生数は、ひじょうに少なく、少数精鋭の授業をうけることのできたよき時代であった。まことにうらやましいかぎりである。戦後は大学の規模が大きくなり、マス教育の時代に突入した。学生がたくさん来てくれないかぎり、私学の経営は成りたたないのである。巨鯨がイワシの大群をのみ込み、それをすぐ吐き出すように、毎年大勢の入学者をむかえ、また入ってきただけの学生が社会にでてゆく。

マス教育は、きめの細かい教育をほどこすことができぬ欠点はあるが、学習意欲のある学生は、学校や教師にたよらず、みずから率先して勉強する。当局者はすこしでも学校をよくしたいと思って、いろいろ改革に手をそめる。学部の人事において、著名な教師、マスコミで売れている者をパリのキオスクの広告とおなじにみなし、専任教員として採用する。が、じっさいは見かけだおし（外観はよくても、内容がよくない）のばあいが多いようだ。

それよりも非常勤講師として、薄給にあまんじながら、熱心に教育に従事しているＯＢを、（たとえ乏しい業績であっても）特段の配慮によって、優先的に採用すべきである。よい教師の利点をみとめはするが、けっきょく学校をよくするもの、学校の評価を高めるものは、学生の素質で

ある。戸坂　潤は、教師のよい、わるいというのは末（すえ）の問題（重要でない）だという（「大学検討座談会」『文藝春秋』第十三年　第五号所収、大正10・5）。

いまの時代、何をもって研究業績というのか、ひじょうにあいまいになっている。理科系の論文のように、結果がはっきり現われ、検証できるものとちがい、文科系の論文は、紀要などを見ると、おもしろくないばかりか、支離滅裂のものが多い。書き手は、読者のことを考え、しっかりと構成し、読みやすく書くべきである。が、じっさい他から面とむかっての批判がないため、わけのわからぬ論文を平気でかいている。それはちんぷんかんぷん、本人にもわからぬしろものである。

ファシズムにむけて、国民を思想的に統制する手段として活用したのは、治安維持法とすれば、その尖兵となったのは特高（特別高等警察の略）であり、これはとくに左翼思想の運動をおさえつけるために設けられたものという。旧体制下、天皇制絶対主義は、間諜政治をおこなったが、日本にかぎらず、ソ連邦やナチ政権下のドイツもおなじである。

ソ連邦では、――

オフラナ（秘密警察）[27]やゲー・ペー・ウー（国家政治保安部）

ナチス・ドイツの――

ゲスターボ（秘密国家警察）

などが、国事犯（反政府活動家）の撲滅にあたった。

治安維持法が公布される大正十四年（一九二五）から敗戦をむかえる昭和二十年（一九四五）まで、この法律によって逮捕された者は数十万人、送検されたものは七万五千人以上という。[28]虐殺されたもの、獄死したものは相当な数にあがるだろうが、いまつまびらかにできない。

法政の学生や教員は時局にのぞみ、恐怖政治のもとで、みずからの思想信条にしたがい、勇を鼓して社会運動のなかに入っていったが、かれらの勇気は当然たたえられてよい。それは法政人がもつ根性のあらわれであった。……

注

（1）『読める年表　日本史』自由国民社、平成2・10、九二五頁。

（2）内田魯庵『「案頭三尺」――露西亜は分裂乎滅亡乎』『太陽』第24巻第一号所収、大7・1。

（3）『昭和十五年度　思想特別研究員検事　松村禎彦報告書　最近に於ける左翼学生運動（主として学生グループ関係）』司法省刑事局』、二頁。同書は『最近に於ける左翼学生運動』と題して、東洋文化社より復刻（昭和47・9）。

（4）同右、三頁。

（5）『内務省警保局編　社会運動の状況　1　昭和二～四年』、三〇一頁。同書の復刻版は、三一書房より刊行（昭和46・11）。

（6）同右、三一二頁。

（7）『法政大学八十年史』昭和36・8、六九頁。

（8）カルル・ヨーハン・カウツキー Karl Johann Kautsky（一八五四～一九三八、ドイツの政治家・社会民主主義者。ドイツにおけるマルクス主義の碩学）は、エンゲルスの秘書として活躍した。

（9）山田盛太郎（一八九七～一九八〇、昭和期のマルクス主義経済学者）は、東京帝大経済学部助教授のとき、いわゆる共産党シンパ事件（昭和5・5）で検挙され、七月退職。昭和二十年（一九四五）経済学部に教授として復職。『日本資本主義分析…』は、わが国の資本主義の基礎の分析を企画したものという（「序言」）。この書物は、左翼学生によって読書会でよく使われたが、よみづらいばかりか、内容もわかりにくい。

（10）『法政大学経済学部六十年史』刊行年不詳、八頁。

（11）右におなじ。

（12）注（7）の四七〇頁。

（13）注（10）の二七頁。

（14）三木　繁（一九〇八～七六、高校教師、大学講師）は、口数のすくない人であった。人と話をするときは、口ごもるように、ゆっくりと、おだやかに話した。酒とタバコが好きであった。深夜まで読書をした。勤め先のオンボロ高校では、英語と倫理社会をおしえ、晩年都内の私大にドイツ語の講師として出講した。ドイツ語は、ちょっとテキストに目を通すだけで十分だから、楽であるといっていた。旧制の姫路高生のとき、ドイツ人が戸外で歌を教えてくれたという。

教場では兄・清のことを話題にしなかったが、われわれ生徒は、この先生を畏敬をもってみていた。長身であり、写真でみる清とおなじ顔をしていた。一男一女があり、子どもはみなできがよかった。奥方はたしか水戸の出身である。

キルケゴール（一八一三～五五、デンマークの神学者・哲学者）の「現代の批判」（『キェルケゴール選集　第一巻』所収、改造社、昭和10）を訳している。訳稿を提出し、夜中にふと目がさめたとき、いろいろ気にかゝる箇所が出てきたという。ほかに「姉さん（清の妻・喜美子のこと）の思ひ

出」「幼き者の為に」などのエッセイ、兄・清の哲学について書いた未発表原稿が龍野市のかじょう館にある。未見。

(15)「あの男（三木のこと）は、うつかりすると増長したり、慢心したりしますから、上からおさへつゝ引立てる事が必要でせう。…」（石原　謙宛波多野書簡――大正14・2・3付）。石原　謙（一八八二～一九七六、明治から昭和期のキリスト教史学者）は、当時東北帝大教授。

(16) 河野興一「和辻さんの心遣ひ」『三木　清全集　第10巻　月報』所収、昭和42・7。

(17) 梯　明秀「三木さんと、私の学生時代」『三木　清全集　第3巻　月報』所収、昭和41・12。

(18) 右におなじ。

(19) 谷川徹三著『自伝抄』中央公論社、昭和62・4、五〇頁。

(20) 日本大学の非常勤の口は、円谷（つぶらや）弘（ひろし）（一八八八～一九四九、日大法学部をへて京大文学部哲学科の選科生となった）の世話によるもので、はじめ工学部でドイツ語と英語をおしえた。

(21) 文化学院は、西村伊作（一八八四～一九六三、大正・昭和期の教育家、反戦と不敬罪で検挙された）によって、大正十年（一九二一）御茶ノ水駿河台に開校したもの。この学校は国家の学校令によらない、自由で独創的な、こぢんまりとした学校である。当時の一流の学者や芸術家らがおしえた。

(22)「対談　田中美知太郎（京大名誉教授）・上山春平（第47巻責任編集者）――西田哲学の意味」『日本の名著　第47巻　付録　15』所収、中央公論社、昭和45・8。

(23) 注（10）の二六頁。

(24)『法政大学新聞』昭和30・10・25付。

(25)「大学検討座談会」『文芸春秋』第13年第5号所収、大正10・5。

(26)「ファシズムに抵抗　守りぬいた学問の自由」『法政大学新聞』所収、昭和23・11・1。

(27) 松本穎樹（ひでき）著『防諜論』三省堂、昭和17・2、一五頁。

(28)『日本大百科全書　24』小学館、昭和63・11。四八〇頁。